



TITLE:

劉六劉七の亂について

AUTHOR(S):

西村, 元照

CITATION:

西村, 元照. 劉六劉七の亂について. 東洋史研究 1974, 32(4): 478-520

ISSUE DATE:

1974-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153529>

RIGHT:

劉六劉七の亂について

西村元照

はじめに

一 パニック時代

二 起義の経過

(一) 群盜期

(二) 旗上げ期

(三) 綱領期

(四) 政權構想期

三 起義の検討

(一) 戦法

(二) 構成者

(三) 支持者

(四) 首謀者

おわりに

はじめに

十六世紀初頭、正徳時代（一五〇六—一六二八）は中國全土が農民起義に明け暮れた時代であった。わけても正徳四年（一五九〇）に始まり、足かけ四年間、殊に正徳六年からの一年七ヶ月間激戦が續けられ、河北（北直隸）、山東、河南、山西、湖北（湖廣）、江蘇・安徽（南直隸）の七省に涉つて展開された「劉六・劉七の亂」は、起義参加者延べ數十萬人、正徳六年六月以降五度も京師北京を脅かし、鎮壓には太倉銀二百萬兩を要したという一大農民戦争であった。

この農民起義に關しては、中國に於いて李光壁⁽¹⁾、趙儷生⁽²⁾兩氏の秀れた研究が既に存在するが、我が國では佐久間重男氏

が口頭發表せられただけである。これら先學の研究成果に導かれつつ、本稿では「劉六劉七の亂」の具體像を克明に描き出すことに焦點を合わせて執筆した。稿を始めるに當り、まず起義の發生すべき時代背景から論及しよう。⁽⁴⁾

一 パニック時代

弘治十八年五月辛卯、孝宗皇帝がなくなると、孝宗の嫡長子で年齢十五歳の武宗皇帝が十一日後に即位した。稀代の好事家として知られ、本紀以外に「武宗外紀」なる書物まで残されている武宗皇帝も、皇太子の頃には學問好きで、官僚の名前もよく知り、禮儀作法をわきまえていたので、孝宗から溺愛された。殊に佛教や梵語にはことごとく通曉していたが、しかし何分年齢が若く、その上騎射が得意で少し遊び好きでもあったので、孝宗は舊制をよく守るように諭し、大學士劉健らに後見方を託して他界した。⁽⁵⁾

かかる青年才子が帝位に即くや、数々の奇行ぶりを發揮した。お忍びで掖門を出て苑囿に遊ん(微行)だり、宮中で騎射を行ったり、更に宦官に商店(賣和店)を作らせ、算盤と張簿を持つて商賣のかけひきの眞似ごとをしたり、バー(廊下家)で酒と女に入り浸ったり、はたまた猿回し・曲馬・鬪鶏・犬追いに興じたりで、毎日のように宮廷内での外泊が續いた。正徳三年七月には禮部に命じて全國から藝人を呼び集めさせ、宮中で筋斗・角抵・竿木・魚龍・曼衍等の百戲を開催したことすらある。⁽⁶⁾しかし何より有名なのは、正徳二年八月、宮中に創られた豹房であった。⁽⁷⁾錦衣衛指揮同知の宦官于永は回りの女が中國人より美麗なことを説き豹房に回りの女を導き入れたため、武宗は豹房を新宅と呼び、三十一歳で死ぬまで十五年間、毎日のように通いつめることになった。

武宗をこのような御亂行に誘ったのは、もと東宮附きの劉瑾・馬永成・谷大用・魏彬らのいわゆる「八虎」・「八黨」と呼ばれる宦官達であった。⁽⁸⁾このため英國公張懋・大學士劉健・謝遷・吏部尚書馬文升・戸部尚書韓文らは、亂行・冗食・冗費、宦官の重用等を直ちに止め、早起きして朝政を視、新帝に對する朝野の期待を裏切らないよう、口を酸っぱく

して毎日のように諫言を繰り返すが、武宗は判った判った（從之、嘉之、知之）と言うばかりで一向に實行せず、經筵も中止しがちで、祭禮も親王を遣わして代行させる有様であった。

そこで正徳元年十月、劉健・謝遷・韓文らは諸惡の根元である八虎を彈劾するため合同で上奏しようとし、宦官の王岳もこの謀議に加擔したため、劉瑾らはあわや南京に左遷される所であったが、機先を制して劉瑾が武宗帝に泣きつき、逆に司禮監太監の地位を獲得し、翌日王岳を捕え、劉健・謝遷らを致仕させることに成功した。^(a)これ以後いわゆる「文臣の禍」が始まり、彈劾に加わったメンバーに「奸黨」の汚名を着せ、次々と免官・左遷して行き、代りに劉瑾の息のかかった焦芳・劉于・張綏らで京官の主要ポストを固めていった。^(a)更に正徳二年閏正月庚午には武宗が上奏文の裁決を煩わしがっているのをいいことに、

上毎日、吾用爾、何爲而乃一一以煩朕耶。宜亟去。自是數次後、瑾不復奏。事無大小、惟意裁定。凡百詔旨、上多未嘗知之。

二度と皇帝には奏上せずとも、劉瑾が勝手に處理することを許された。このため劉瑾の下す内示と詔敕とが一字一句違わなくなったので、世間では「立地皇帝」とまで噂された。^(a)更に三年八月には、もともとあった東西兩廠の特務機關の他に、更にこれらをも監督する内行廠を設立して、徹底したスパイ政治を行ったため、劉瑾の権力は不動のものとなった。

しかしこれだけ専權を恣まにした劉瑾も、正徳五年四月に寧夏の安化王朱寔鐸が劉瑾を誅するとの名目で叛亂を起した後、^(a)八月には十九罪を問われ、籍沒されることになったが、何分劉瑾追い落しに宦官張永が一役買っていたため、^(a)武宗の没するまで宦官の専權は揺るがなかった。

ところで宦官が専横を極め、恐怖政治が行われたため、人民大衆は完全なパニック状態に陥ったのであるが、そのパニックの構造を見ておこう。まず宦官が直接手を汚した害毒から見ると、皇莊、皇店、皇鹽、皇棍等の一連の「皇害」が指摘出来る。

皇莊とは皇親王に與えられた土地のことで、州縣の徵稅權が及ばず、一般稅制の圈外にあり、宣宗が張皇太后に與えた仁壽宮莊に始まる。⁽⁶⁵⁾しかし夏言の調査によれば、元來皇莊は極めて特例的に發給されるもので、弘治年間まで全國で數ヶ所しかなかった。ところが武宗が即位するや、弘治十八年十月の一月月間にまず七ヶ所の皇莊が建てられ、正徳元年にも六皇莊が追加され、その後數年の間に、遂に皇莊は三萬七千頃の多きに達したという。⁽⁶⁶⁾これら次々と發給された莊田は、投獻によるものが殆んどだったが、その獻ぜられる土地とは往々にして自己の所有地ではなく、小民の土地を無理矢理奪つて莊田化するものであり、しかもその大多數が北直隸に集中していた。⁽⁶⁷⁾この結果農民が土地を奪われるといった弊害では止らない。

というのは莊田の管理運営を擔當する宦官（管莊太監）が、額外の誅求をして八割以上着服したばかりか、宦官につき隨う旗校・跟隨・腹心・爪牙等のいわゆる家人達が、通過する州縣から食費・車代・人夫代等の名目で巧みに財貨をゆすり取つたためである。⁽⁶⁸⁾

次に皇店とは官店の一種で、元來官營の倉庫保管業を意味した。⁽⁶⁹⁾正徳年間、宦官于經によって始められた皇店は、九門關・張家灣・河西務・蘆溝橋・臨清・宣府・大同等の交通の要衝地に置かれ、商人の荷物は勿論のこと官僚の行李まで檢閲し、無賴の輩を使って無理矢理課税し、⁽⁷⁰⁾毎年八萬兩を國家に納める他は宦官が着服したため、怨聲が路に滿ちたという。

また皇鹽とは宦官が鹽引を奏乞して鹽の取引に乗り出すことで、一旦許可が得られれば、彼らは船上に黃旗を掲げて「欽賜の皇鹽」と書いたため州縣官は全く手が出せず、半ば公然と私鹽を販運して私腹を肥やしたことをいう。

更に奇抜な思ひつきによって、次々と宦官が全國に派遣されたが、⁽⁷¹⁾彼らは「御用」を名目として通過する州縣で賄賂を貪り取り、「上賜の皇棍」をかざして人民をなぐり殺したが、⁽⁷²⁾官僚は問責することが出来なかった。奇しくも夏言が述懐しているように、宦官の行爲の上に「皇」の一字を附加することによって、⁽⁷³⁾彼らの異常なまでの誅求・蓄財は正當化され

たのであった。

かかる一連の「皇害」は、劉瑾の巧みな官僚操縦によってより一層増幅された。というのは正徳二年閏正月、尙寶司卿崔瑑らが朝命で遠出するのに、慣例に従って轎に乗ったことを取り上げ、獄に下した。⁶⁰⁾これ以来どんな瑣細な落ち度でもただちに摘發されるという「法禁」が開始された。また三年八月には、前戸部尙書韓文の在任中の過失を暴き出し、大同に米一千石を輸せしめたが、これ以来諸文官に對する「罰米」がしきりに行われ、翌月には罰米の納入に期限までが設定された。⁶¹⁾その他、官僚の人事權等も劉瑾が一手に握っていたため、人事異動に際しては賄賂(謝禮)を納めねばならず、また朝覲の際にも京師に來れば必ず劉瑾に賄賂(拜見禮)を納めねばならなかった。⁶²⁾そこで官僚達は京師の富豪から一時金を借用してまで(京債)賄賂に充當せねばならず、その分を任地に歸って公金を流用して辨濟するという有様⁶³⁾だった

かかる宦官の誅求(皇害)と地方官による増幅とを諸に被ったのが一般農民達だった。既に正徳元年、大學士劉健は言っている。皇莊の害により「農民は家産を賣り拂い、兒女を身賣りさせるといふ有様で、怨聲地にとよもし、流民(逃移)が路に滿ち溢れている。京畿内外で盜賊が横行するのはこのためだ」と。⁶⁴⁾河南巡撫鄧序も「河南で盜賊が起ったのは、農民が窮乏し財産が盡きたためだが、それというのも皆、宦官(前鎮守太監)の誅求による」といっているし、更に直隸巡按李嵩は「眞定府の南宮・寧晉等の縣下の宦官(管莊内官)がひどく誅求しているから、いまに盜賊が起るだろう」と警告している。⁶⁵⁾更にまた六年三月の詔敕でも、「近頃盜賊が横行するのは災害によって衣食に困ったばかりか、本來賑恤せねばならない筈の地方官が、「京債の穴埋めに追われたためでもあろうか逆に」税を二重取りしたため、農民は流民化し、誘い合つて非を爲すようになった」と述べている。⁶⁶⁾これらによつて當時の農民達は宦官と地方官とから二重に誅求され、飢え、苦しみ、怨み、生産手段を捨て、流民化し、盜賊として蹶起しつゝあったことが判るのである。

しかしかかる宦官の苛酷すぎる苛斂誅求(皇害)とは、當時明朝の置かれていた商品生産の發展、生産力の増大、銀經濟の普及といった基底的な社會的趨勢に對する、極めて特異な特權の發動形態であつたことはいふまでもない。

しかしたとえ原因がいかに特異であろうとも、苦しみ抜き流亡化した農民達が、全国各地で盜賊化しつつあり、誅求度のもっとも大きかった京師近邊から、果して大農民起義が勃發したのである。

二 起義の経過

劉六・劉七の亂は、その規模や経緯に即してみると、(一) 群盜期(正徳四年～五年十月二十二日)、(二) 旗上げ期(五年十一月～六年六月十六日)、(三) 綱領期(六年七月～六年十月末)、(四) 政權構想期(六年十一月～七年七月二十二日)の四つの時期に分けて考察することが出来る。⁽⁶³⁾

(一) 群 盜 期

「正徳四年正月以來全國で群盜が横行し、火つけ物とりを恣にした。北直隸や山東、殊に順天府下の薊州・霸州などの被害は計算できない程だ」と六科十三道御史は、四年正月以來の群盜の様子を訴えている。⁽⁶⁴⁾ 明史紀事本末卷四十五「河北盜」(以下「紀事本末」と略記す)には、京師の南では騎射が好まれ、往々路に待ち伏せて劫掠し、「響馬盜」と號したといっている。山東でも四年二月に王紐吉ら百三十九人の群盜が捕えられた。⁽⁶⁵⁾

かかる群盜の亂發を放置出來ず、時の爲政者劉瑾は、四年七月二十日、特別に御史四人を設け、柳尙義を天津に寧杲を眞定に配置し、彼らに私兵(家人)を携えて捕盜に専念させることになった。⁽⁶⁶⁾ 寧杲は什五連座の法を作り毎日のように賊を眞定に護送したが、その度に鼓笛隊に先導させたので笛や太鼓の音が絶えなかったという(紀事本末)。⁽⁶⁷⁾ しかし毎日捕えられて來るこの盜賊とは、小物達や農民(平民)の誣告された者達のことであつて、例えば強賊王大川が寧杲の監督地を通つた時にはわざと捕えなかったといふ。⁽⁶⁸⁾ そしてこの群盜期に直接捕盜役に當つていた私兵集團の中に、本稿で扱う農民起義の首謀者達は多くいたのである。

楊虎の場合、まさにこの寧果麾下の健兒であり、弓馬が殊に上手だったが、やがて衆數百人を集めて滄州に入つて劫掠し盜賊になつたといふ。⁶⁴⁾

劉七の場合、本名を劉晨といい、その黨とともに皆、順天府の永清縣と固安縣の農家の出である、霸州では盜賊が多くて制壓出來なかつた。たまたま劉七と兄の劉六とは騎射が上手だったので、その黨の齊彥名らとともに捕盜に協力して手柄を立てた。その後事あるごとに劉七らに捕えさせるようになった。ところが劉瑾の家人が劉七らから賄賂をせびつて得られなかつたので、誣告され盜賊であるということにさせられた。さつそく寧果らが遣わされ、妻や一家の者達が連座させられた。劉七らは苦しみ抜き憤懣やるかたなく、ついに味方を集めて略奪するようになったといふ。⁶⁵⁾

ところが本當に略奪を開始してみても、弱小の群盜である以上まさに捕盜の對象となるから、勢い大盜賊の下に身を寄せざるを得なくなる。劉六・劉七・楊虎らは相い前後して張茂なる大盜賊の傘下に入つた。

張茂は順天府文安縣の大盜で、家には高樓があり、屋敷は幾棟もあり、祕密の倉庫まで設けられていた。彼は無賴者(亡命)を盛んに招き寄せていた。劉晨(劉七)、劉寵(劉六)、齊彥名、李隆、楊虎、朱千戸らはみな彼の舍弟だった。張茂は近侍太監の宦官張忠と義兄弟の契を交し、彼を通して豹房に賄賂を贈り、天子の蹴鞠遊びに出るようになったので益々憚る所がなくなつたといふ。⁶⁶⁾この張茂の財源が略奪によつたことはいふまでもない。例えば喪中の修撰官康海を順德府内邱縣に襲ひ財産を奪つた。康海は同郷の好で劉瑾に泣きつき、奪われた財は劉瑾からの預り物だとのふれ込みで、順德知府に府民から收斂して辨償させたことがある。⁶⁷⁾これなどは大盜が捕われずに、一般人民がいわれなき收奪を轉嫁された代表的な一事例といえるだろう。

しかしこれだけの太監張茂も、正徳五年春から夏にかけて、河間參將袁彪の盜賊狩りには苦しめられ、遂に宦官張忠に救いを求めた。そこで張忠は私邸に酒席を設けて袁彪と張茂とを招き、袁彪には張茂一味を捕えないようにさせ、一方張茂には袁彪の管轄區域で侵寇させないとの暗黙の密約をさせた。⁶⁸⁾

ところがちょうどその頃寧果は、捕盜が順調に進んでいないとの廉で度々彈劾され、功績を立てざるを得ない立場にあった。⁽⁶⁴⁾ 先の康海事件で借りのある大盜張茂にねらいを定め、奇計を用いて擒ることに成功した。そこで残された舍弟達は自首を謀り、宦官張忠らの斡旋で銀一萬兩を獻すれば赦してもらえることになった。⁽⁶⁵⁾ かくして五年十月二十二日、霸州の賊劉七ら二十四人は一旦罪を許され、他の盜賊を捕えるのに協力させられることになった。⁽⁶⁶⁾

ところがそんな大金の出所がないので、劉六らはひそかに楊虎に命じて附近を略奪させ獻上金にあてる計劃だったが、たまたま楊虎が官署を焼き打ちしたため、計劃は失敗し、再び盜賊となった。⁽⁶⁷⁾ 彼らの下に集まる無賴の徒は日に日に多くなったが、まだ一人立ちするには到らず、一旦畿内の大盜白瑛の下に身を寄せた（紀事本末）。

(二) 旗 上 げ 期

正徳六年正月、兵部の要請により都指揮同知李瑾が京營軍千人を率いて賊を討つことになった。この李瑾の報告では、白瑛ら三〇四百人は二隊に分れて山東東南部をあばれ廻っているが、何分賊は民間の馬を獲得して一晝夜で數百里も馳せることが出来るのに反し、官軍は馬が少なく追うことが出来ない⁽⁶⁸⁾と述べている。更に三月六日、薊州都御史李貢によれば、劉六劉七らは山東を流劫して捕盜官六人を殺したため京營軍の増加を要請して認められている。⁽⁶⁹⁾

これらによって二三の事實を知ることが出来る。第一に盜賊討伐をものはや捕盜御史に委ねておくことが出来ずに、京營軍が前面に出て來たことが判る。これは起義軍側の戦力上昇に見合った官側の對應措置であることはいうまでもない。つまり第二の事實、起義軍側に壓倒的な機動戦力が備って來たことが判るが、この點に就いては後に詳述したい。更に見逃がすことの出来ない第三の事實は、五年十月末に保釋されてから共に白瑛の下に身を寄せた張茂の殘黨達が、二隊に分れて行動している點である。胡世寧の書翰によれば、楊虎軍が婦女・蠢弱を携えていたのに比し、劉六劉七軍は精銳中心で規律正しいという際立った差違が見られたが、合流してからは劉六軍の質も落ちつつあったという。⁽⁷⁰⁾ 更に江海殲渠記にも、

楊虎は白瑛の死後その部下を率いるようになった。劉六劉七軍と楊虎軍とは絶えず離合を繰り返したというから、蹶起の初期から既に二分の可能性のあったことを確認して、六年正月以降の起義軍の行跡をたどってみよう。

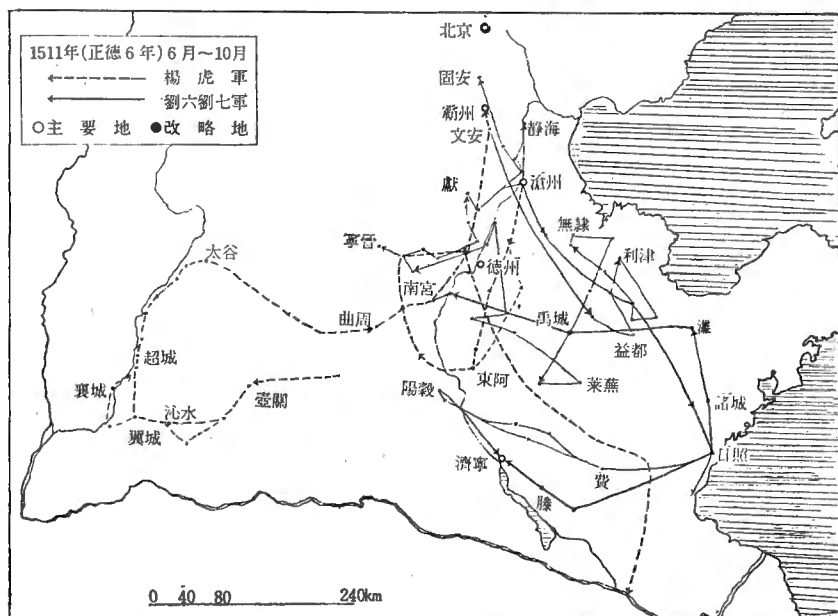
ところが六年正月以後六月までの間、起義軍がどこでどうしていたかを、日を追って明らかにすることは出来ない。おおむね山東を中心として、北直隸・河南を流賊的に轉掠していたことが、諸種の史料より歸納的に推論出来るだけである。

そしてむしろこの時期に於いて注意せねばならないのは、起義軍の攻撃目標が一つの方向性を持ち始めていることである。例えば四月二十二日山東巡按陸藝によれば、山東の濟南等の府下の鎮・集・驛遞二十數ヶ所が賊に破られ、役所(官解)は燒かれるし住民の死んだ者も數百人いる。ところが官軍がまず遁れてしまふから、賊は無人の境を行くようなものだ⁶¹という。京營軍の指揮官李瑾でさえ平民を捕えて盜賊だと報告している。四月二十四日萊州府濰縣を攻めた時、知縣がまず遁去して縣城は陥落し、賊は官の武器をことごとく奪った⁶²。五月十日陸藝の報告では、山東の流賊は濟南等の府州縣の庫藏の糧銀一萬兩以上を奪った⁶³という。これらの事實から、起義軍は今やかなりおおびらに縣城等の役所を襲い、官側の倉庫から食糧・銀兩・武器等を調達し始めたのに對し、知縣等の責任者がまづ先に遁げ去るという事態が目立つて來たことが判る。

かかる起義軍側の目標のエスカレートは、單に物品に止まることなく、戰鬪の主力となり得る人材の確保という點で顯著に見受けられる。六年正月劉六劉七らは衆をあつめて安肅縣を攻め、當時獄に繋がれていた仲間の齊彥名を奪い返した(紀事本末)。また兵部も、群盜が庫獄を攻劫し、害をなすことが増えたればこそ、正月以來京營軍を捕盜に参加させたのであった⁶⁴。七修類稿にも通過地の獄囚を放つて助けと爲したと指摘している⁶⁵。つまり起義軍が縣城を襲う目的は、單に銀・糧・武器等の物品を奪うことだけではなく、獄に繋がれていた囚人達を救い出し、起義軍中の有效な戰鬪員に仕立て上げるためでもあったことが判る。

更に囚人達ばかりでなく、有能な人材を集めることには積極的だった。例えば順天府霸州文安縣の生員趙鏐（趙風子）なる者は、勇力があり任侠を好んで、いつも大言壯語していた。劉六らが文安縣を攻掠した時、趙風子は妻子を伴って賊を避けた。賊が妻を犯そうとしたので、趙風子は怒って賊二人を殺したため、劉六劉七らに擒えられ、説得されて起義に加わったという。趙風子はこの後、楊虎の部下劉三軍の參謀として活躍することになるが、生員のような知識人が起義軍に加わったことは極めて重要な事實であろう。更に六年五月十三日、この日、市中で磔にされた官大保は順天府永清縣の胥吏出身であったが、酒と賭け事が好きで、無賴の徒を集め、劉七軍に加わって山東南部の攻略を擔當していたことが判る。

かかる起義軍側の指向性を踏まえた時、六年六月初め頃に行われた二大遠征の意味も亦自ら明らかになって来るだろう。六月九日楊虎らは山西に入って沁水縣を破り、汾水沿いを遡るように翼城から太谷までの各縣を破り、六月十六日には山西十八盤山口から歸り、文安縣で劉六らと合流した。一方劉六らは湖廣から江西まで行き、南から北上して山東の各縣を経て霸州に至ったが、この二大遠征を指して兵部ですら、縦横すること無人の境を踏むが如しと述べている。つまり物的にも人的にもかなりの實力を備え、官軍に比して壓倒的な機動力を持ちつつあったこの時點で、起義軍が山西方面と湖廣・江西方面とに大遠征をしたことは、まぎれもなく地域的起義軍から廣域軍團への脱皮であり、旗上げの壯舉であったことを物語る。従って遠征先でもともと蹶起していた農民起義を系列化することも亦目的の一つであった。例えば六月五日、山西の李華らが劉瑾の殘黨を集め、衆二千人を擁して、服や旗を赤色で統一して目じるしとし、劉六らと合流して山西潞安府壺關縣であばれ廻っている。また六月九日、河南按察使彭澤の意見でも、賊軍は土賊を糾合し流民（亡命）を呼び集め、善良者を脅迫しつつ、直徑百數十里にわたる地域を支配下に入れると述べているからである。



第一圖 劉六劉七の亂 行軍圖

(三) 綱領期

六年六月十六日に文安縣で翌々十八日には霸州で、楊虎軍と劉六軍とは合流した。この後八月初めまでの間、兩軍はそれぞれ山東北部から北直隸南部の各縣を轉戦した(第一圖參照)が、その壯烈さは旗上げ期に見られた傾向性を完全なまでに徹底させるものであった。江海殲渠記(以下「江海記」と略記)によって、この間の起義軍の日々の行跡を知ることが出来る。それによれば通過地の各縣を、しらみつぶしに總管めするように略奪が行われた。殊に七月六日には劉六ら二三千人が眞定府南宮縣を攻め、知縣を捕え、縣廳舎を燒き、獄囚を解放し、更に寧晉の皇莊を襲った。先の李嵩の豫言通り、果してこれらの皇莊が襲われたのであるから、まさに宦官(管莊太監)への恨みを晴らしたことになるだろう。七月九日劉六軍と楊虎軍とが集合して二千騎で眞定府獲強縣を攻め、三日間の猛攻の後、倉庫や獄を襲い、知縣を殺した他、官・民・吏・商の死者は數え切れない程だったという。七月二十四日楊虎軍と劉六軍とが合流してまた順天

府文安縣にやって來た。京師に極めて近いため戒嚴令が施かれた。七月二十六日楊虎ら二千騎が靜江縣を破って漕運船を焼いた後、翌々二十八日一千騎で滄州を圍み、八月六日まで八日間包圍を續けた（江海記）。ところがこの滄州包圍戰中に一見極めて奇妙な事件が起る。

八月一日都御史馬中錫を通じて、劉六・劉七・楊虎・李隆ら總勢四十三人が自首を願ひ出たのである。というのは六年三月以來捕盜に當っていた馬中錫は、前漢の宣帝の時、龔遂が渤海の盜賊を平定した故事に倣って招撫して解散させようと思ひ、劉六らの行く先々に布告を張り出し、官には捕えさせずに飲食まで提供させて、決して殺さないと約束し續けたため、劉六らは半信半疑であつた（紀事本末）。そこで德州の桑兒園でボス交渉が行われた。劉六は降服説だったが、會飲の席上劉七は、現在國政が宦官の手に握られていて馬都堂が自分の言葉を實行出来ない點を突き、更に言葉少なに「私は朝廷が自分らを赦してくれないことを既に知っています」といった。馬中錫の反論に對し、劉七は「劉六らは赦さず云々」、賞金まで懸けて彼らを斬ることの出来る者を募集している詔敕の寫しを袖中から取り出し、奮い立って刃を抜きその場を去つた。この事件を文字通り取れば、起義首謀者達が悔悟し招撫を受けようとしたにも拘らず、それが實らなかつたことにより、起義軍が官側の懷柔策を最終的に拒否し、更に熾烈な鬭争に突き進む切っ掛けを與えられたことにもなるだろう。

ところが次に指摘する起義軍側の内部事情や、官側の捕盜強化とも併せ考えるなら、この事件は、時間かせぎのための演技だったとさえいい得ることになるのである。

というのは、まず起義軍側に即してみれば、ちょうどこの頃に始めて鬭争のスローガンが出現し、更に首領が選出されるという事態が生じていたからである。西園聞見錄（以下「西園錄」と略す）によれば、七月十五日董仲義ら五百餘人が劉三らの營内に參加した。全部で一萬人にも達しようか、それぞれの賊が財をかすめ人殺しをして氣聲は増々上つた。彼らは酒を酌み交しながら相談した。

我們這些人馬便也、難成大事。不若先從本縣起手、然後遍歷天下。招集數萬人馬、以『建國扶賢』爲名。須要個毒手、人纔歸順。若不從的逢州破州、逢縣攻縣。先要得了河北・河南、後到南京。見有空位、那時節、着爾們拜相封侯、全家都享富貴。卻不是好。(等語)

我らのこれだけの人馬では大事を成し遂げ難い。まず手近かな縣から事を起し、その後全國を遍歷しよう。數萬の人馬をかき集めるには『國を建て直し、賢者を扶く』を名目としよう。多少惡い口口でも、すべからく人才には歸順を求めるべきだ。従わない州縣は攻めて破ればよい。先づ河北と河南の地を獲得し、その後南京に行こう。南京には空いたポストがある。そこでお前らを皇親に逢わせてやり、富貴にもしてやろうという。つまりここに起義軍の間で共通して確認された事柄は、(一)現狀の力量不足、(二)基礎固め、(三)建國扶賢のスローガン、(四)人才の獲得、(五)武斷先行、(六)南京攻略、(七)皇親層への依存の七項目であった。これらのうち、基礎を固め、人才を確保し、武斷主義を貫徹させてゆく方針は、既に起義軍が旗上げ期以來その攻撃目標を絞りつつ鬭争をエスカレートさせて來たことの當然の歸結であり、從來の戰鬭方針を再確認したものといえよう。ところがここで新たに『國を建て直す』というスローガンが入ったことにより、この起義は單なる火つけ物とり運動から、「世直し一揆」という大義名分||理念が導入されたことになる。しかしその「建國」とは京師北京の明朝政權を打ち倒し新たに國を建てるのではない。むしろ南京で皇親王を擁立して分立國家を建てるか、あるいは現政權を溫存したまま南京の皇親層に依りかかって仕官の途を求めていた程度のものであり、まだこの時點では起義政權を樹てることを目差してはいなかったものといえよう。尙、李光壁氏が「起義は具體的綱領を持たなかった」と斷ぜられるのはこの滄州綱領や更に新蔡宣言(後述六〇頁以下)からいっても正しくない。

スローガン採擇の直後西園聞見録では、劉三・趙風子・刑老虎・董仲義らが楊虎を推して大王にしたという。ところが罪惟録や明書では、劉六を首領とする一軍と楊虎軍とに二分割したといっている。今までの經緯等から判斷すれば二人が同時に首領になったものと考えたい。いずれにせよこの時點で世直し一揆というスローガンを作り、首領を互選までして

いる以上、起義軍の志氣はますます盛んになったであろうから、先の降参劇はまさに時間かせぎのためのジェスチャーだったと見做さねばなるまい。

一方官側の捕盗體制にも變化が生じる。七月二十五日兵部尙書何鑑は、京營軍の力量では起義討伐が不可能であり、その上たまたま北邊が平靜でもあるから、宣府と延綏の邊軍二千五百人を捕盜に當らせることを提案し許されている。八月二日陸完が邊軍と京營軍との總指揮官に任ぜられ、馬中錫らは逮捕投獄される。九月二日には遼東・宣府等の邊軍四千五百人が追加されるなど、起義軍の前面には邊境防備軍が現われることになる。更に邊軍の投入ばかりでなく、七月十六日には豫め民壯を訓練し各村鎮には火器の手入をさせた。七月二十五日武藝を諳んずる者を募集して官側に吸収し、賊軍に加擔させまいとしている。八月一日には天津地方で民間の弓馬を嗜む者に捕盜への協力方を要請し、更に富豪の家が自家に擁している暴力團(勇悍)を、排甲に再編成して武器を支給し、捕盜に當らせることが許されている。これらの事實から今や明朝國家は利用出來得るあらゆる手段を點檢し、起義軍討伐に本腰で乗り出したことが判るのであり、先の降参劇はかかる鎮壓體制の強化整備に對する、起義軍側の内部結束強化のための芝居でもあったことが、この點からも證明されるよう。

ところで降参劇の行われていた最中にも滄州では包圍戰が續けられていた。楊虎ら二千餘人は船を奪って浮橋を作り、兵を列ねて三日間城を數重に圍んだ。そこへ劉六らが馳せつけ小船で城を四面から取り圍み更に五日間攻防したという。ところがたまたま劉六劉七が流れ矢に當って負傷したため八月六日包圍を解いたのだが、この間漕運船三百隻を焼き民間の船で焼かれたものは數え切れない程だったという(江海記)。

包圍を解いてから、八月十日順天府霸州の平口で邊軍と初めて對戰する(江海記)。これまで負けを知らなかった起義軍はこれを見くびっていたが、立て續けに敗れたため始めて懼れを知り、南に逃げ出した。六部隊に分れて南走したというが、第一圖に示す通り楊虎軍が運河沿いを眞南に、劉六軍が山東濟南府寄りを東南方向に大きく二手に分れて行軍してお

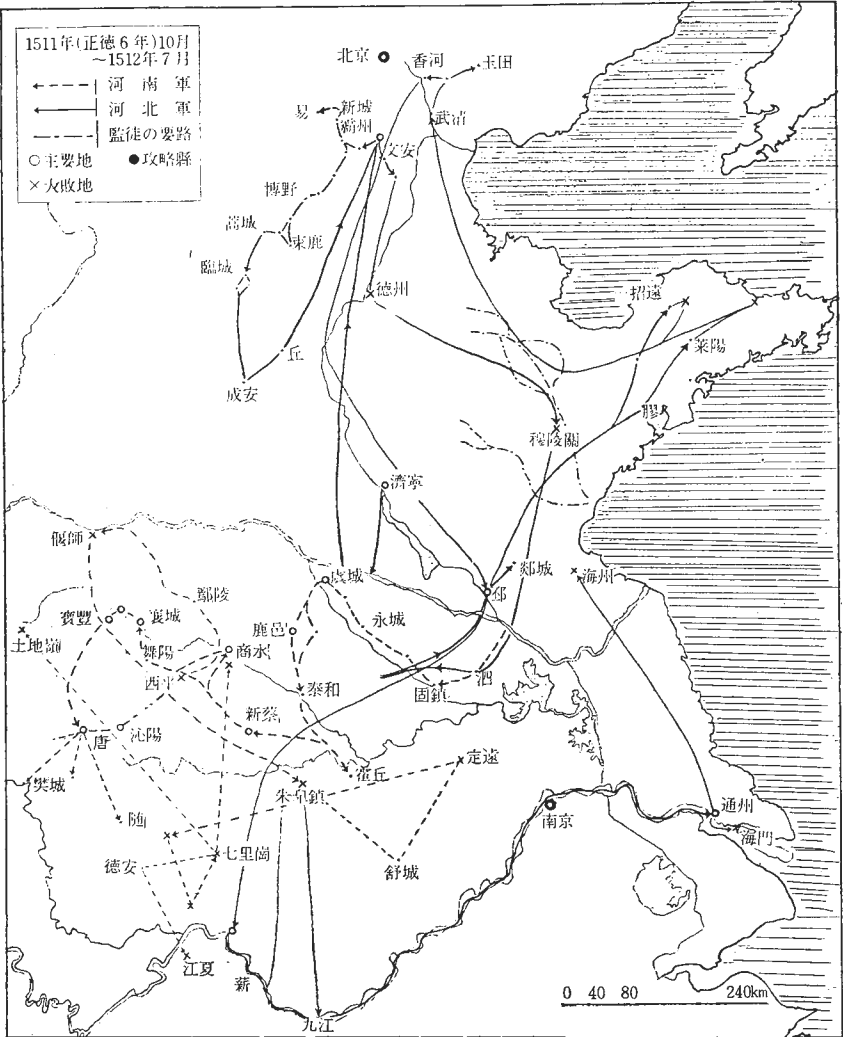
り、敗走とはいっても勢力は益々盛んになったという。

楊虎軍に焦點を合わすと、臨清・東昌の線まで南下し、八月十五日から西寄りにまた北進を始めて威縣と新河縣を破つたが、九月二日阜城縣の宋門店と棗強縣の禮儀鎮とで大敗を喫し、約一千三百人が斬られたため東南方向に遁れ、徐州から宿遷を経て黃河を渡り、永城・夏邑・虞城の各縣を破り、小黃河を渡って歸德州攻略にかかった。ここで全く豫期せぬハプニングが起つた。十月二十四日、楊虎の乗つた船が歸德州義門鎮で轉覆し楊虎が溺れ死んだのである。楊虎の死後起義軍内部には更に大きな變化が生じるが、ひとまず劉六軍の行軍を追つてみよう。

劉六軍は山東東部を南下し濟南・青州・兗州府下の十縣を攻めた。陸完によれば、「劉六らが兗州府を盛んに攻めるのは、ここが皇親王の封ぜられた所だからで、恐らくは親王に救いを求めようとしているのだらう」と述べている。事實この頃涇王朱祐樞や魯王朱陽鑄は起義軍を追い拂うのにやっきになっているし、これ以前にも六年六月には晉王や藩王が捕盜協力を表明し、七月には懷仁王朱聰淑が征盜に當つていた。これらの事實は、先の滄州綱領中に皇親層への依存が唱われていたことでも明らかなように、まさに皇親王中の誰かを説得して明朝現政權打倒に立ち上がらせ、彼らがその正規軍にならんがための武力の押し賣りであつたといえよう。この後劉六軍は日照縣から眞西の方向に進み、十月七日頃濟寧州を攻めて勝てなかつたが、この戦鬪で糧運船一千二百十八艘を焼いた。泊州包圍戦以來起義軍は屢々糧運船をねらつていたが、この濟寧戦は最大規模のものでつたため、十一月十日には明朝政府も、「最近糧運船が流賊に燒き打ちされ、國家財政は缺乏、物價も騰貴している。飢饉で流民が更に増える恐れがある云々」といつて、漕運對策に取り組んでいるから、今や國家の危急存亡にかかわる大問題化したことが知れよう。

(四) 政權構想期

楊虎の死後直ちに趙風子らは劉三を推して首領としたが、これがいわゆる河南の賊である(江海記、罪惟錄、紀事本末)。



第二圖 劉六劉七の亂 行軍圖

河南起義軍は歸德州から南下して亳州・泰和縣・霍邱縣など各縣を攻略して新蔡縣に到る（紀事本末）。途中鹿邑縣と新蔡縣とだけが攻略を免れたのは（罪惟錄、紀事本末）、兩縣が馬・金杯・銀杯・段物等を贈答し一縣の生靈を救つて貰つたためである（西園錄）。これは縣ぐるみの降服であり、縣全體が脅從したことを意味するだろう。

この新蔡縣あたりで起義軍は華々しく再編成を遂げた。劉三は大事を成そうと思い、鹿邑縣で養子になった陳翰や趙風子らと共に謀して、「兵に主なければ必ず亂れる」からという口實で、河南起義軍を再編成した。劉三は奉天征討大元帥、趙風子が副元帥、劉資・馬武・刑老虎がそれぞれ左・右・中軍都督、陳翰が侍謀元帥となり、楊傑・韓信らを二十八營に分けて三十八宿に應ぜしめ、おのおの都指揮等の官を授けた。更に五色の大旗を立てて二十四の名號を着け、また一對の金旗にはこう書いた（西園錄）。

虎賁三千、直抵幽・燕之地。龍飛九五、重開混沌之天。

三千の虎、馳せて直ちに京師に到らん。飛龍は九五の位置にあり（我等が皇帝の位に即きます）。この混沌の天下を開かんと。更に李老なる者に中城兵馬都指揮を授けて鈞牌を造らせ、それにはこのように書かせた（西園錄）。

奉天征討大元帥劉、副元帥趙、仰前途官吏。整備草箭、合用器物。修橋梁道路。迎接者、秋毫無犯。迎適者、寸草不留。違悞者、軍法從事。俱毋違錯。（等字樣）

奉天征討大元帥劉三と副元帥趙風子は、前途の官吏に命ず。馬草・箭竹等の戰鬪に役立つ器物を整備せよ。橋や道路を修理せよ。降服する者は全く犯さないが、敵對する者は見逃さない。間違つた者は軍法によって處斷するといふのであった。

新蔡縣で金旗と鈞牌に掲げられたこれら起義軍のスローガンでは、（一）京師攻略、（二）帝位篡奪、（三）所在の現任官吏への鬪爭支援と降服勧告、という三つの支柱が、しかも布告・命令という形で出されている。先の滄州綱領では「建國扶賢」が謳われてはいたものの、明朝現政權を打倒することはまだ目差されていなかった。ところが今や、直ちに京師北京を衝

くこと、そして起義軍が皇帝の位に即くことを表明している。しかもこの金旗に掲げられた二十字のスローガンは、元末の農民大起義に際し、朱元璋（明の太祖）の率いる紅軍の掲げたスローガンを二字入れ替えただけのものであったから、¹¹⁷政權獲得への意欲の程が窺われる。従って今や起義軍は明朝を打倒し、それに代って起義政權を樹立することを政策日程に掲げたことを意味するだろう。

また奉天征討大元帥以下の官位授與は、まさに政權樹立のための起義軍中樞部の組織化であった。しかも見落してはならないのは、かかる組織化が中樞部に於いて進行しただけでなく、起義参加者をトータルに組織することまで狙われていたことであろう。というのは、正徳七月正月趙風子らが二十八營の人馬を調査したところ全部で十三萬五千餘が有った。¹¹⁸各賊に花名文冊六本を造らせたという。¹¹⁹つまり二十八營に組織された起義軍は、更に各營ごとの起義参加者名簿を有していたのである。これは十三萬を擁する河南軍が末端の兵士に到るまで組織化することを目差していたことを意味するだろう。

更に州縣攻略に就いても、先の滄州綱領では武斷主義が目立ったが、今回の新蔡宣言では支援と降服を勧告命令するが、服従者は決して犯さないことを約束している。時の河南守臣にさえ「劉三はその黨を戒めて妄りに平人を殺さざらしむ。その姦計は劉六の上に出ず」と言わしめている。¹²⁰趙風子の略傳にも「劉三を説得して今まで楊虎のやって来たことをことごとく改めさせ、火つけ物とり殺人を禁じさせた」といっている。事實縣令の妻子を掠した者を趙風子は殺してさえているのである（紀事本末）。だから今や河南軍は無制限の掠奪・殺人を否定し、努めて軍法によって規律ある行動を取らうとし始めたことが判る。

ところがこれだけ明白に明朝打倒を謳い上げ、組織と規律を導入して起義政權を指向しているにも拘らず、河南起義軍本隊は一度も京師攻略に向っていず、もっぱら劉六ら河北軍が京師を脅かしている。

そもそも劉六ら河北軍は六年十月七日濟寧で糧運船を焼き打ちしてから、十二月初めまでの約二ヶ月間、その消息が殆

んど掴めない。わずかに得られる手掛りとして罪惟録では、劉七ら五・六萬人が山東北直隸を往來し河北の地をそこなつたという。ところが今われわれが知りたいのは、六年十一月頃に新蔡で行われた起義軍の再編成に河北軍が参加したかという點である。この點を明らかにする史料は全く存在しないが、しかし再編軍の中樞部が全て舊楊虎・劉三系の人脈で占められていて劉六系の人間が全く入っていないこと、及び明史紀事本末にわずか九字の記載として、「劉六らが徐州を攻め淮西を掠した」と書かれていることから推論すれば、河北軍本隊は劉七が率いて黃河以北を轉戦し、劉六らの一支隊は黃河の南に進軍したことがあり、河南軍が獨走的に出した新蔡宣言を追認する形で、今後劉六ら河北軍が京師攻略の任に當ることになったものと考えられる。

いずれにせよ官軍が臨清に駐屯していた時、その隙を覘つて劉七らは、十二月一日天子が車駕で出郊する所を襲おうと霸州に殺到した。しかし官側が起義軍の動きに機敏に對應したため武宗を襲うことは出来なかった（江海記、紀事本末）。

そこで劉六らは京師の西および南の各縣を轉略して（紀事本末）、七年正月八日また霸州を犯したため、京師にはまたまた戒嚴令が敷かれた。¹²¹正月十三日、河北・河南の賊勢がますます盛んになったので邊軍を大量に増援し、各賊首ごとに官側の討伐責任者を決め、いわばマンツーマン方式で徹底的に賊首首がマークされることになった。¹²²このため河北軍は山東に押し返され、正月十五日臨朐縣陞陵關で李隆軍が大敗（江海記）、李隆は劉七に救いを求めたが、その節操の無さゆえに劉七に斬られた。¹²³（紀事本末）。その後劉六劉七らは二月九日宿遷から黃河を渡り、一旦河南に向けて西進した。¹²⁴

一方河南軍は新蔡から上蔡に進み、潁河沿いの各縣を轉略しつつ、裕州・南陽から唐縣に到るが、途中商水・襄城・郊縣などはいずれも降服している（西園錄、紀事本末）。唐縣の守りは堅く七年正月六日から前後二十八日間、毎日三波の攻勢をかけたが落ちなかった（西園錄）。

この唐縣での長期滞在の始まる直前に不可解な辯明劇が発生する。襄城を降服させ寶豊を攻破した時、河南僉事孫盤に遣わされた生員が「招撫」の黃榜を持参した（西園錄、紀事本末）。そこで趙風子は辯明書をしたためてこう書いた。

先年群奸在朝、舞弄神器。濁亂海內、誅斬諫臣、屏斥元老、未有不亡其國者。乞皇上澡雪精神、獨斷于中、梟群奸之首、以謝天下。斬臣之首、以謝群奸。（等語）

先に奸臣（宦官）が天子を弄び天下を亂した。今天子が一大決心をせられ奸臣を梟して天下に詫びられよ。その後で自分の首を斬ってもらいたいという。そして詔敕をもたらしした生員をねぎらって歸したが、この黄榜を見て動搖し脱落した者が百十餘人出たという（西園錄）。

ここにいる黄榜とは、正徳七年正月十一日に出された上旨のことで、起義軍の分斷懷柔をねらったものだが、これを總督以下各府州縣に命じて黄榜で諭せしめたのであった。¹²³當時明朝は極端な財政危機に見舞われていたから、何としてもまず足元の起義を鎮壓せねばならず、そのためには一方で邊軍を大量投入しつつ、他方では「招撫」という硬軟兩様の構えで起義軍に當ったことは一應理解出來よう。

ところが先に新蔡で起義政權を目差して華々して再編成を行った、その直後であるにも拘らず、起義の指導者趙風子が何故こんな辯明書を作成したのか釋然としない。表面上、辯明の狙いが「天子が宦官を除かないからこそ起義せざるを得ないのだ」という、起義の正當性の喧傳にあったことは疑いなからうが、しかし一方で政權篡奪を豪語しながら、他方で天子に請願するというのが如き自己撞着を何故敢えて犯したのだろう。辯明の意味を李光壁氏は「皇帝權力との妥協」と把え、趙麗生氏は「皇帝擁護の思想」だと説明しているが、¹²⁴起義の發展段階を綱領に即して綿密に檢證したいま、かかる曖昧な説明は許されない。

辯明の狙いは主に二つあったと考えられる。最大の目的は士大夫インテリ層の共感を得ることであつた。というのはかつて劉瑾在世中に文臣官僚達が散々苦しめられたが、趙風子はこの點を鋭く突いて、「文臣の敵「宦官」を除去出来るのは俺達だけだと宣傳し、しかもその宣傳文句に、¹²⁵パニック下で杖死させられるまで劉瑾を彈劾し續けた前南京御史蔣欽の彈劾上奏文中の言葉を借用して來て、士大夫の共鳴を呼び覺そうとしたものと考えらる。事實、辯明書作成の直前に攻破

した寶豐縣では、士大夫の家の門前に欄衫（生員の服）を掛けさせ、部下に侵入を禁じてさえいるからである。つまり新蔡宣言以來規律を導入して殺人を禁じて來たが、わけても士大夫インテリを優遇して知的人才の獲得を狙っていたものといえるだろう。

今一つの狙いは、起義政權樹立に到るまでの段階として、まだ皇親王擁立構想を捨て切っていない、そのため天子への諛言者というポーズを取ったのではないかと考えられる。何故なら辯明劇と前後して皇親王達が毎日のように朝廷に急を告げ、興王、鄭王らが討賊に立ち上っている。更に注目すべきはこの辯明劇の少し以前、舞陽縣を攻め破った時に、獄囚の中に德靜という僧侶がいたが、これを「唐王の庶子」に仕立て上げ、賈勉兒の營内に留めて權威附け（名號）に利用しようとしていたことが判明しているからである。

ところで唐縣で長期滞在中の河南軍は四方に分遣隊を遣わしていた（紀事本末）。西方均州を攻めた時、馬文升の家があるので退却した。東方泌陽を攻めた時、前大學士焦芳の家を襲い、焦芳に逃げられたため、彼の服を庭の樹に着せかけ、罪狀を敷え上げて斬り、この賊を我が手で斬って天下に詫びたかったと後々まで趙風子は述懐したという。この焦芳と馬文升に對する起義軍の態度に、罪惟錄の著者查繼佐は贊辭を贈っているから、當時に於いてもある程度士大夫の共鳴はあったと思われる、この點趙風子の狙いはある程度成功したことになるだろう。

この後七年二月から三月にかけて河南軍は西平縣で破れたが、官軍の油斷に乗じてすぐ隊を建て直し、西華・鄆陵等の縣を破って黃河南岸まで北進したが、河南府下の戦いで大敗し、夜陰に乗じて汝州から汝寧府まで一氣に南下した（紀事本末）。固始縣朱阜鎮で駐屯した所を官軍に襲われ人馬五千が死んだ他、脱落者が無數に出、例の軍馬文冊もこの時紛失したという（西園錄）。この後四月、河南軍は安徽・河南・湖廣の間を東西に激しく逃げ、舒城縣で勝った以外は負け續け、汝寧府光州光山縣七里岡で大敗後三手に分れて敗走した。劉三は河南府嵩縣土地嶺で自殺し、賈勉兒は開封府項城縣丁村で捕われた（紀事本末）。趙風子は五月五日德安で僧侶の度牒を奪って自ら髪を剃り、揚子江を渡って江西の賊をバツ

クに再舉を圖ろうとしたが、五月十日武昌府江夏縣管家套で捕えられた（西園錄）。ここに河南軍は完全に潰滅したのである。¹³⁹

一方劉六らの河北軍は、二月九日一旦河南方向に進軍した後、二月十六日には再び黃河を渡って邳州に現われ、淮安・宿遷等を轉戦し（江海記）、二月二十六日には再び邳州攻めを行った。州城からわづか二里ばかりの所で白衣のユニホームを着て野に満ち、三方向から城に迫ったという（江海記、紀事本末）。この後三月始めまで邳州附近でゲリラ戦を展開し、三月八日頃から山東の登州府に向けて東進した。四月三日登州・萊州府下の嵩淺坡村・界河・古縣集等の所で大敗を喫し、五千三百餘人が殺傷されたため（江海記）、劉六・劉七・齊彥名らは三百騎で官軍の包圍を突破、間道を経て一氣に順天府通州武清縣の河西務に到り（江海記、紀事本末）、香河・寶坻等の縣を轉略、尼關から塞外に出ようとしたが通れなかったため（紀事本末）、また臨清を経て南下し、四月二十六日には邳州に到り、三日後黃河を渡って西南方向に走り去った（江海記）。河南の光山・確山・固始等の縣を経て（紀事本末）、湖北の黃州府黃岡縣團風鎮で船に乗り移ったが風で檣が折れ劉六は水死した（江海記）。しかし劉七・齊彥名らは船十三艘・衆五百人で揚子江を下り、九江・鎮江を経て閏五月十六日には揚州府通州に着いた（江海記、紀事本末）。ところが蘇州の人が魚雷のようなもの（火老鴉）を作って應戦したため、舟居に安んぜず日々陸に上って轉戦し、六月一日には淮安府海州を攻め、山東に歸ろうとしたが官軍にはばまれて果せなかった（江海記、紀事本末）。六月十八日には海門の七里港から海に出ようとして失敗した（江海記）。また揚子江を遡り、南京にも三度追ったが、殊に六月二十二日には黃州府蘄州から上陸し、光州・固始まで進撃してまた九江に還っているように（江海記、その往來は無人の境を行くようなものだったという（紀事本末）。勿論、常州、鎮江、蘇州等の府下もしばしば犯された（江海記）。しかし七月十八日通州で停泊中に數十年に一度という颱風に襲われ舟がすっかり壊れたので狼山に登ったが、二十日と二十一日に官軍の猛攻を受け（江海記）、齊彥名は鎗で殺されたが、劉七はなお親信の者數十人を率い、小舟を奪って逃れようとした所を、弓で射られて溺れ死んだ。¹³⁹

ここに七年七月二十二日、劉六・劉七の亂は完全に鎮壓されたが、九月一日劉七・齊彥名らの死骸を霸州で梟し、趙鳳子、賈勉兒らを九月二十八日に磔にした上、賊首六人の皮を剥いで鞍を作り、武宗帝は乘馬の時に愛用したという。¹⁴⁴

やっと平定したといっても課税すれば農民は生きてゆけぬから、税糧を免じて賑恤する必要ありとする意見が、兵部尙書何鑑らによって屢々上奏されたため、六年十月以後、河南・山東・北直隸等で盛んに蠲免が行われた。¹⁴³

三 起義の検討

起義の経過を一通り見終つたいま、この農民戦争で特徴的に見受けられる事柄を、(一)戦法、(二)構成、(三)支持者、(四)首謀者の四點から検討し直してみよう。

(一) 戦 法

経過を通じてまず氣づくのは、起義軍が騎馬を主體としていたため、スピードが速く機動性に富んでいる點であつた。六年正月李瑾は「賊が民間の馬を獲得し一晝夜で數百里走れる」と指摘していたし(本文五十一頁参照)、明史紀事本末にも賊のさつそうと去來する様は風や雨のようだと述べている。またその行軍を指して、無人の境を行くが如しという形容が屢々用いられていた。このように起義軍が馬を豊富に確保出來たのは、起義の發生地である北直隸の順天・保定・眞定等八府下で、京營軍に支給するための馬が民間で養われるという「羣牧」の制度が永樂十一年以來始められ、弘治六年等¹⁴⁵にいくらかの改革が行われたが、養馬の義務は依然として民間に存続したため、起義の初期から既に豊富な馬を有していたものと考えられる。また政權構想期の七年三月頃になると、賊一人につき馬二頭を有し、一日で二三百里走れる程になつたといふ。¹⁴⁶

しかし起義軍の機動力は馬のみによって支えられていたのではなく、むしろそのゲリラ的戦法に特徴があつた。「野を住み家として城郭を占領しない。虚を蹈んで陣地を作らない」といわれるように(紀事本末)、起義軍は野營を主とし、據

點を作らなかつた。滄州包圍戰の時でさえ、「毎日盜賊達は遠くまで掠奪にゆくが、賊首達數人は城外の大街にとどまつて民家に入り込み、晝も夜も酒と女に浸りきり」⁽⁴⁴⁷⁾だったというから、たとえ行軍を小休止する時にさえ決して城内では留まらなかつたことが窺えよう。

更に屢々「賊は不意を突いて犯す」といわれるように（紀事本末）、奇襲作戰を得意としたようである。この點を分析して捕盜責任者は「賊は集團で行動するが、官軍はばらばらである」といい、また「官軍は一道にして行き奇兵を設けな⁽⁴⁴⁸⁾い。たとい兵を分けて合勤する際にも伏兵を設けな⁽⁴⁴⁹⁾い」というように、もっぱら官軍の融通の無さと起義軍側の敏捷性という説明が多くなされている。

しかしかかる起義軍の臨機應變の戦法にはそれなりの科學的根據があつた。それは起義軍の有していた情報網の存在である。情報官は官側からも民間からも得られたが、ここでは官側に限ってみよう。例えば滄州包圍戰中德州で馬中錫とのボス交渉が行われた時にも、詔敕の文面まで豫め宦官から入手していた。⁽⁴⁵⁰⁾また燕山左衛軍の王宣父子から、京師の動靜を逸早く通知されていたばかりか、屢々武器まで供與されていた。⁽⁴⁵¹⁾かかる際立った事例ばかりでなく、各地の戰場では、官側の「命令系統が一つでなく何人もの手を経るから機密が洩れる」と⁽⁴⁵²⁾いったことが、むしろ日常的に起り得たのであつた。趙麗生氏⁽⁴⁵³⁾はかかるゲリラ的戦法に言及して、この後、明末の張獻忠の亂や、清後期捻軍起義に受け繼がれることになつた戦法の、その最初のものとして高く評價している。

ところでこれら騎馬・野營・奇襲・情報網等の要素より、むしろ一層ゲリラ戰を可能にし起義を長續きさせたファクターは起義軍の構成自體に見つけられる。

(二) 構 成

起義軍は中核軍と脅從軍とによって構成されていた。「どの戦いにも脅從者を驅り立てて前に居らせ、かけ聲とともに突撃させる。すると官軍は畏縮してしまふから、賊はあざ笑ひ殺掠をほし⁽⁴⁵⁴⁾いままにする」といわれるように（紀事本末）、多

數の脅從軍の存在が指摘出来る。かかる脅從軍がどのようにして起義に参加したかという点、胡世寧は「各所の壯丁を捕えて來、武器で脅迫して鞍馬を與え、賊軍に参加させた。初めは髪と皮膚とに傷をつけて脱走しにくくし、やがて放火や城攻めに驅り立て掠奪物を分配し、罪を重ねさせて逃げられないようにした」といつている。⁽⁰⁵⁹⁾つまり初めは文字通り脅かし従わせるのであるが、やがて分配の實利によって繋ぎとめるという方法であり、滄州綱領でもやがて富貴にさせてやるという場當りの實利が目立っていた。この點、明末清初期以後の農民起義のスローガンに均田や抗租といった生産關係に係わる綱領が入るのはまだ大きな差違が認められる。

ところでこの脅從軍は起義を繼續させる効果を持った。というのは「官軍の討伐にあえば、捕虜軍が前面に當てられ、盜賊は馬を立てて後ろから監視した。⁽⁰⁵⁸⁾勝てば直進せねばならず、敗ければ逃げ遅れて捕われる。官軍の殺すのはかかる脅從者ばかりである」といつているように、脅從軍が鬭爭持續のためのクッションとして使われていたことが判明するとともに、官軍の側でもむしろかかるクッションを歓迎していたことが同時に明らかになる。

というのは官軍の功績が捕えたり殺したりした盜賊の人數で計算されたため、いきおい手ごわい賊首達よりは組しやうい脅從軍を捕えて點數をかせぐことになった。⁽⁰⁵⁹⁾彰德府下の史泉で劉七らが馬も弓も捨て去って酒と女に浸っていたことがある。この時捕盜官は賊首だけを捕えれば利が少いからと、わざわざ發砲し脅從者を擒ろうとしたことすらあったのである。⁽⁰⁶⁰⁾

ではかかる脅從軍が起義軍中でどの程度の割合を占めていたであろうか。正徳六年六月頃、綱領期に入つたばかりの劉六軍と楊虎軍とを合わせて八割を占めていた。⁽⁰⁶¹⁾ところが政權構想期に入つて七年二月頃になると、劉六ら河北軍では更に脅從率が増して九割八分までが脅從であつた。⁽⁰⁶²⁾ところが同じ頃河南軍では、いま假に騎馬軍を中核軍とすれば、脅從率は七割ぐらゐに減つていたと考へらる。⁽⁰⁶³⁾

これらの比率は河南軍と河北軍の性格をよく表現している。つまり河北軍はたとえ數萬までふくれ上つても少數精銳の

中核軍一千ばかりが健在であつたから、その行軍も非常に敏捷であり續けたため、何度か大敗を喫しながらその度に中核軍が逃れて、また隊を建て直しては起義の繼續を計ることが出来た。ところが河南軍は縣ぐるみの降服を勧告し續け、人集めに熱中したため外見上の起義軍中の人・馬数はどんどん増加して、十三萬の多きに達した。これを花名文冊によって把握するというような机上の組織化は進んだが、しかしこれが即、中核精銳軍の繼續的培養には結びつかず、むしろ中核軍の足を引っばる結果となつた。このため河南軍は屢々同一地點で數日間停滯して城攻めを行い、唐縣では遂に一ヶ月も駐屯してしまつた。ところが當時既に明朝はマンツーマン方式による徹底鎮壓を指令していたため（本文六十二頁参照）、捕盜に當る官軍の焦點が合わせ易くなり、唐縣での長期駐屯後、西平、河南府下、朱臯鎮等で連續して大敗し、その後は殆んど官軍に勝てないまま鎮壓されたのであつた。つまり華々しく再編成してから、わずか五十日間程、起義政權構想に酔つたあと、逃げ惑いつつあつてなく潰滅させられるという脆弱さが河南軍にはあつたものと考えられる。

ところで脅従率が高く、彼らは使い捨てのクッションの役割りを持ち、逆に中核精銳軍が騎軍中心で敏捷だつたという一連の事實から推せば、脅従軍が行軍先の農民から現地調達されることが多かつたであろうことは多言を要すまでもなく明らかであろう。先の劉健、鄧庠の言葉や、六年三月の詔敕にも明言されていたが、起義平定直後の詔敕でも、良民が収奪を逃れるために起義に参加したことを追認している。

更に起義構成員中には鹽徒が入つていて、彼らはむしろ中核軍に近い存在だつたろうが、これが劉六軍に多かつたと考えられる點を指摘しておこう。というのは劉六軍は山東濟南府寄りを好んで行軍し、七年四月三日登州で大敗後間道を通じて北上したことや、劉七が揚州府通州まで追われながら尙且つ山東歸還を企てるなど（本文六五頁参照）、山東東部との關係が極めて深い。ところが天下郡國利病書原編第十六冊山東・安丘縣志には「鹽徒の要路」なるものが詳細に記載されていて、これを圖示すれば第二圖のようになり、まさに山東東部を通っているから、劉六軍への鹽徒の加擔があつたと考えられる。尤もこれが劉六軍をどのように性格づける効果を持ったか明證出来ない。

この他勿論起義構成員中には無頼や囚人も多くいて中核軍を形成したが、これらに就いては後に詳述する。さて中核と脅従とによって構成された起義闘争は掠奪のみによっては繼續し得なかった。群盜期から四年、旗上げ期から約二年の長期闘争を支えたものは誰だったか。

(二) 支 持 者

彭澤は「農民の蓄えていた金銭や穀物が全て賊軍の所有に歸する」ことを指摘していたし、姜洪も「牛を殺し米倉を空にして食糧を農民から調達している」といい、王相に到つては「盜賊が通過した村々では、牛を殺して提供し、甚しきは賊のために門や屏を支えて矢や石を防いでやつたり、盜賊の道案内役をつとめている」とすら述べている。これらによって起義軍が農民から物的援助を得ていたばかりか、情報まで與えられるというように積極的に支持されていたことが判る。しかしその支援とは「從之則生、不從則死」といった、生殺の權限を起義軍が完全に握っていたればこそ可能だったと一應考えられはする。

ところが當時のパニック情況下では、むしろ起義軍は廣く農民から支持されていたと見なければならぬ。何故なら群盜期以來の捕盜官が農民（平民）を捕えて盜賊と誣告することが多かったことや、殊に寧果に至つては「まるで草をでも刈るかのように農民を殺しまくったため、眞定府附近では恨み骨髓に達した」といわれているから、起義軍への期待はむしろ大きかった。賀銳は「賊の通過地の農民が食糧・武器を進んで起義軍に提供しているのに對し、官軍が來れば門を閉して逃げた」といつているし、陳天祥も「賊のよぎる所の農民（姦民）には賊の害毒を助ける者が多い」と指摘していたからである。

更に士大夫層からの心情的支持もあったと考えられ、少し時代は後になるが查繼佐の如きは、この起義を評して「小仁義を行えり」といい、また祝允明が江海殲渠記のような起義の大事記を後世に残している點、「郷紳の市隱的レジスタンス」以上のものがあつたのではないかと考えられる。この點趙風子の士大夫對策は一應の効果を上げてはいるが、何分即

戦力としては役立たなかったようである。

(四) 首 謀 者

最後に起義の首謀者達の検討をしておこう。劉六らは皆霸州の農民であった。首謀者の階層が殆んど農民層にあることは、當時のパニック下で食いつめ、止むに止まれず蹶起したことが判る。馬中錫が辯護したように、彼らは「饑えと寒さに迫られ盗賊化したので、もともと死をまぬがれるためだけの」、生存権の主張であった。

首謀者が農民出身であり、起義構成員の大半を占めた脅従軍も農民が殆んどであり、起義を支援したのも農民であった以上、「劉六、劉七の亂」とは基本的に農民大起義であり、饑餓暴動的色彩を帯びていたことが判る。

饑餓暴動なればこそ、飢えを潤すために果敢に火つけ物とりを行い、略奪物を分配し合ったのであった。ところが綱領期に入っても被略奪対象は「官・民・吏・商」の全階層に亘っていた(本文五十四頁参照)。この點階級的利害に立脚した起義とは決していいえない。従って滄州綱領にも新蔡宣言にも、生産關係に係わる要求主張は全く見られなかったのである。

しかし彼らが盛んに官署を襲い、寧晉皇莊を略奪し(本文五十四頁参照)、また焦芳を血祭りに上げようとした點などからすれば(本文六十四頁参照)、彼らを暴動に蹶起せしめた特權階層(殊に宦官)を直觀的に選別して復讐しようとしたことが判るだろう。この點からすれば全く盲目的な饑餓暴動では決してなく、殊に政權構想期に規律を導入して河南軍がむやみに農民を殺すことを禁じた點など、ある程度の階級性を行動によって主張したものといえるかもしれない。

次に首謀者達の共通した特徴として確實に言い得ることは、彼らが單なる農民ではなく武藝に通曉した者達だったことだろう。劉六劉七や楊虎らが私兵として活躍したことは勿論のこと(本文五十頁参照)、群盜期大盜といわれた張茂や白瑛の下に集まった「無賴・亡命」と稱せられる者達は、まさにかかる腕利き達の總稱であった。

そこでいま無賴に視點を合わせると、當時むしろ「無賴業」とでも言い得る程に、廣汎な無賴の職種を指摘出来るので

ある。官軍の私兵（家兵）⁽¹⁸²⁾、富豪の私兵（勇悍）⁽¹⁸³⁾、宦官の家人、鹽徒等がそれらの代表的なものが、彼らに共通しているのは、支配階層の手先としての暴力的役割りである。これら無賴業は當時のパニク下で突如急激に生み出された私的暴力裝置と見るべきではなく、商品生産の發展、生産力の増大、地主層の土地集中等々の要因が重なり合つて進展した階級隔差の増大に伴い、むしろ徐々で且つかなり普遍的に存在して來たものと考えられる。⁽¹⁸⁵⁾であればこそ廣く民間に「武藝を諳んずる者」や「弓馬を閑習する者」達が存在し（本文五十七頁參照）、彼らは決して「民壯」の役や自己防衛のためだけに武事に勵んだのではなく、いわば私的暴力裝置の豫備軍だったといわねばならないだろう。

とすれば、當時のパニク下に於いておびたしい數の流民が発生したことは、私的暴力に對する需要（特權的私的暴力裝置＝無賴業）と供給（諳武藝者＝農民）のバランスが大きく崩れ、私的暴力の供給過多を惹起し、これらが起義軍の中核部隊として吸収されていったものと考えられる。「皇害」を分析した夏言が、パニク下で「生産力を奪われた農民（流亡者）のうち、強者は盜賊となり、善者は壓殺され、巧者は權勢の手先（家人）となった」と述べているのは、⁽¹⁸⁶⁾かかる社會動勢を端的に表現したものと見えるだろう。事實劉六らは勿論のこと、その部下になった官大保や李華も無賴・亡命を糾合していったし（本文五十三頁參照）、旗上げ期以後、起義軍が人材の確保に焦點を合わせ、即戦力として囚人を利用したことは既に述べた通りである。従つて起義中核軍の有するかかる無賴性を強調するなら、「劉六・劉七の亂」とは支配階層の養成しつゝあつた手先の反逆、⁽¹⁸⁷⁾いわば「鬼子の亂」だったことになるだろう。

鬼子なればこそ劉七や齊彥名は豹房にまで入つた經驗があるのであり、⁽¹⁸⁸⁾また滄州綱領中に皇親王への依存を掲げ、盛んに親王擁立に奔走することにもなつた（本文五十九頁、六十四頁參照）。この點、明朝そのものや特權階層（皇親王）の存在を容認するという限界をあらかじめ起義に設けることに繋がつたものと考えられる。

かかる起義の限界性を突き破つて、起義政權構想まで策定させたのは、趙風子や陳翰のようなインテリが起義に参加したためであつた。しかしインテリにはまたインテリの限界があつた。新蔡で明朝打倒を宣言し、組織と規律を導入して再

編成された河南軍は、州縣ぐるみの降服を勸告命令し續け、殊に寶豐では自己矛盾を承知の上で辯明書まで作成して士大夫の共鳴を促し、士大夫の家への侵入を禁じて禮遇の實を示すなどして、極力知的人材を獲得しようとしていた（本文六十三頁参照）。これは河南軍が再編成されて以來一度も負けを知らなかったという餘裕の上に立脚して行われたものであり、このゆとりにより軍事的戰術的裏付けがあるものなら、知的人材を糾合することにより更に飛躍的な起義の展開が生れ、「起義政權」そのものを樹立することも亦可能となったかもしれない。ところが河南軍の軍事的基盤は脆弱だったため（本文六十九頁参照）、あつてなく崩壊させられることになったのである。

更にインテリの参加に原因があつたかどうか判然としないが、賊首間でかなり意思の疎通を缺いていたことも事實のようである。劉六軍と楊虎軍とはもともと體質的差違があつたが（本文五十一頁参照）、楊虎なき後の劉三・趙風子らの河南軍は殆んど劉六ら河北軍を無視して獨走したし、また劉七は李隆の無節操さを憎んで斬つてすらいたのである（本文六十二頁参照）。かかる賊首間の反目を分析することは困難である。しかしせつかく旗上げ期に二大遠征までして他地域の各個起義の系列化を計りながら（本文五十三頁参照）、他方身近かな所で反目し合い、齟齬を止揚するだけのイデオロギーをまだ持ち得なかつた點、まして當時全國各地で展開されていた農民大起義との連帶が出来なかつた點、やはり起義の限界の一つであつたといえよう。

おわりに

十六世紀初頭、中國では宦官が專權を極め、「皇害」が蔓延し、地方官によって更に増幅されたため、社會は完全なパニック状態に陥り、農民は流亡化しつつあり、全國的に農民起義が発生したが、京師近邊では最大規模の農民戰爭が勃發した。

正徳四年に始まり足かけ四年間、殊に六年からの一年七ヶ月間、七省の廣範圍に涉つて展開された劉六劉七の亂は四つ

の時期に劃して考察することが出来た。殊に正徳六年六月には二大遠征を敢行して他地域起義の系列化を企てた。また七月には滄州で綱領が作られ、單なる火つけ物取り運動から「建國扶賢」をスローガンとする世直し一揆に進んだ。更に六年十一月、河南軍は新蔡で「明朝打倒」を宣言し、組織と規律を導入し、起義政權を目差して華々しく再編成されたが、河南軍は七年五月に、河北軍も七年七月末に鎮壓された。

この起義の特徴を分析すると、戦法としてゲリラ戦を得意とした。また起義軍は農民脅従軍と無賴中核軍とより構成されて居り、一般農民からの積極的支援も確保していた。

更に起義首謀者等を検討することにより、この起義には「饑餓暴動」という側面と、「鬼子の亂」という側面と兩方面が強かった。これらの側面が滄州綱領を強く規定し、階級的主張を鈍らせるとともに、皇親王依存というが如き限界（體制是認）を附與した。

インテリが起義に参加したことにより、かかる限界を乗り越え、一應「起義政權構想」を策定させるという華々しい効果を起義に與えた。しかし反面、河南軍はインテリ禮遇に視點を合わせすぎ、軍事的基盤が脆弱だったため、あっけなく壊滅させられたのである。

ところでこの農民起義は、本來同時に進行しつつあった全國的農民大起義の中で位置づけられねばならず、またその場合「流民」問題等が更に重要な課題となつて來、無賴論も亦、本來當然流民問題の一つとして設定しなければならぬのであるが、本稿では果せなかつた。

最後に見逃してならないのは、嘉靖期以後の上からの改革が、まさにこれら正徳期全國農民大起義の壓殺された、その直後から始まっているという點であろう。明末清初一條鞭法から地丁銀に到る一連の税制・役制改革の研究に於いて、少くとも我が國ではこの農民起義が殆んど等閑視されて來た。しかし改革の前提として行われた清丈でも、治安對策的效果が同時に狙われていたのであり、一連の改革を餘儀なくせしめた最大の起爆剤の一つとして正徳期農民戦争があつたこと

を、いくら注意してもしすぎることはないであろう。

註

- (1) 李光璧「明中期劉六・劉七の農民大起義」(歴史教學一九五一、四期)、『中國農民起義論集』(五十年代出版社、北京一九五四 一四五―一五七頁)に復載。後同じタイトルで加筆修正を加えたものが『中國農民起義論集』(生活讀書新知三聯書店 北京 一九五八 二六七―二八七頁)に掲載されたが、本稿で引用するのは全てこの修正論文である。
- (2) 趙德生「明正德間幾次農民起義的經過和特徵」(文史哲一九五四 十二期)。同じタイトルで高昭一氏との共著『中國農民戰爭史論集』(新知識出版社 一九五五 一三四―一五三頁)に復載。本稿では後者を参照した。
- (3) 佐久間重男「明代正德期の農民暴動―劉六・劉七の亂を中心―」(發表要旨)、『集刊東洋學第五號 仙臺 一九六一 一二頁]。尙、アジア歴史事典第九冊(平凡社 東京 一九六二)の「劉六・劉七の亂」の項目も、佐久間重男氏が執筆しておられる。
- (4) 正德時代を概説的に扱ったものには、李洵『明清史』(人民出版社 北京 一九五六)、孟森『明代史』(中華叢書編審委員會 臺北 一九五七)、谷光隆『王陽明』(人物往來社 東京 一九六七)、高陽『明朝的皇帝』(學生書局 臺北 一九七三)等の書物がある。殊に李洵氏の明清史の第三章第三節(同書七二―七八頁)には、劉六・劉七の亂に對する簡単な分析が行われている。
- (5) 武宗皇帝に關する記述は特に明示しない限り「武宗外紀」によった。
- (6) 明實錄正德三年七月壬子。
- (7) 明實錄正德二年八月丙戌。
- (8) 明實錄正德二年九月辛丑。同十二月辛卯。豹房には綽吉我些見などのラマ僧が出入するようになり、ラマ教のタントリクナ祕戲で武宗を歡喜させたため、遂に正德十年にはカルマパ派の「活佛」迎請という事件まで起ったという(佐藤長「明の武宗の活佛迎請について」塚本博士頌壽記念佛教史學論集、一九六二)。
- (9) 澤田瑞穂「太監劉瑾」(天理大學學報第五十四輯 一九六七)に詳しく述べられている。
- (10) 明實錄正德元年十月戊午。
- (11) 正德二年閏正月庚戌には給事中艾洪以下二十一人を闕下で杖し、二年三月辛未には奸黨五十三人を朝堂に榜示して更に文臣官僚の追出しを強化している。
- (12) 後注(13)參照。
- (13) 明實錄正德三年八月辛巳。
- (14) 明實錄正德五年四月庚寅。この時、安化王朱寘鐫が唱えたのは、
近年以來、主幼國危。姦宦用事、舞弄國法。殘害忠良、蔽塞言路。無復忌憚。致喪天下之心、幾亡神器之重。(中略)

獎率三軍、以誅黨惡、以順人心。特茲曉諭。(云々)
 というのであった。叛亂そのものはわずか十九日間で平定され
 た。

(15) 明實錄正德五年八月丁酉に

下劉瑾于獄。瑾降奉御。上猶未有意誅之、及親籍其家、見
 金銀累數百萬、其他寶貨不可勝計。(中略)上大怒曰。瑾
 果反。乃以付獄。于是六科給事中謝訥・十三道御史賀泰
 等、列奏瑾罪曰。(中略)私藏軍器、偽造御璽、扇中藏刀、
 出入禁闥、陰謀不軌、罪二。(中略)在外鎮巡官奏事、皆
 先以揭帖、取進止于私宅。或奏未進、先授以旨。中外傳
 播、及次日奏下、無一字異者。人呼瑾爲立地皇帝、罪六。
 (中略)以焦芳・劉宇・張綏・曹元爲心腹、楊玉・石文義
 爲爪牙、孫聰・張文冕爲刀筆。(中略)内外官不時訪察、
 任意黜陟、罪十。用侍郎韓福、肆虐湖廣、饋銀、至十餘萬
 兩。盜賊緣此蠭起。(中略)罪十一。(中略)陞遷官員、拜
 謁門下、仍致賂遺、謂之謝禮。否則輒加罪。譴朝覲官、至
 京索賂、動以千數、謂之拜見禮。各官回任、倍取之民、以
 致民窮盜起、罪十三。(下略)

(16) 寧夏の亂を平定するに際して、大學士楊一清と宦官張永とが
 密約を行い、京師へ凱旋した直後に、劉瑾は謀叛の罪に問われ
 ることになった。(明史卷三百四「張永傳」、明史卷一百九十八
 「楊一清傳」)。劉瑾が籍沒、誅された直後、五年八月辛丑や同
 月甲辰等に「劉瑾の黨」の大量處分が行われ、劉瑾の創始に係
 る「新例」は舊に復されたが、全體としてみれば宦官勢力は依
 然大きく、殊にもとの「八虎」達すら處分されなかった。

(17) 清水泰次著『明代土地制度史研究』(大安書店、東京 一九
 六八)に詳しい。

(18) 皇明經世文編卷二百二、夏文愍公文集、「勘報皇莊疏」。

(19) 明實錄正德二年九月辛丑朔に

錦衣衛指揮使朱成、進大興縣田家莊地八頃五十四畝有奇。
 (中略)爲皇莊。且乞蠲其稅。詔從之。令少監成玉管理。
 凡以地獻官者、多非己業。朝廷不究其實、遞從而納之。以
 致小民互訟、屢奏皆此類也。

(20) 明實錄正德三年秋七月辛酉に

給廢雲侯周壽潤縣來安務莊田八百七十頃。(中略)畿郡
 賜田既多、小民多失業、云。

(21) 皇明經世文編卷二百二、夏文愍公文集、「勘報皇莊疏」に

然皇莊既立、則有管理之太監、有奏帶之旗校、有跟隨之名
 下、每處動至三四十人。其初管莊人員出入、及裝運租稅、
 俱是自備車輛夫馬、不干有司。正德元年以來、權奸用事、
 朝政大壞。於是有符驗之請、關文之給。經過州縣、有廩餼
 之供、有車輛之取、有夫馬之索。其分外生事、巧取財物。
 又有語言不能盡者。及抵所轄莊田處所、則不免擅作威福、
 肆行武斷。(中略)幫助爲虐、多方掊剋、獲利不貲。輸之
 宮闈者、曾無什之一二、而私入囊橐者、蓋不啻什八九矣。
 尙、王世貞の弇山堂別集卷九十四には、かかる史料が多く掲げ
 られている。

(22) 佐久間重男「明代の倉庫業に就いて」(東洋學報第三十一卷
 第四號 一九四八)に詳しい。

(23) 明實錄正德十六年三月丙寅に

上廟于豹房。(中略)是日又傳遺旨。(中略)于經首開皇店於九門關外・張家灣・宣・大等處。稅商權利、怨聲載路。每歲額進八萬外、皆爲己有。

(24) 明實錄正德九年正月丙戌。同正月丁亥。

(25) 明實錄正德元年九月辛卯。

(26) 丁易『明代特務政治』(中外出版社 北京 一九五一)に詳しい。一九七一年汲古書院からの同書影印本には、間野潛龍氏の解題が附せられている。

(27) 弇山堂別集卷九十六に

南京吏科給事中孫懋等言。(中略)南都初聞、意變與〔胡〕守約、必有稽遲御用重情、繼聞宣在途、醢酒作威、肆行兇惡。所過州縣、縱令家丁索賂折乾、多或百兩。且聲言上賜之皇棍、聽撻死、官吏勿問。

(28) 皇明經世文編卷二百一、夏文愍公文集、「勘報皇莊疏」に

皇之一字、加於帝后之上、爲至尊莫大之稱。今姦倖之徒、假之以侵奪民田、則名其莊曰皇莊。假之以罔求市利、則名其店曰皇店。又其甚者、假以阻壞鹽法、則以所販之鹽、名爲皇鹽。卽此三言、足以傳笑天下、貽譏後世、甚非臣等所望於陛下者也。

(29) 明錄正德二年閏正月乙丑。

(30) 明實錄正德三年八月庚寅。

(31) 明實錄正德三年九月庚戌。

(32) 前注(3)參照。

(33) 明實錄正德四年春正月庚申に

命給事中張禴・段多(中略)、查盤南北兩直隸及浙江諸省

錢糧。先是、諸司官朝覲至京。畏瑾虐焰、恐罹禍、各斂銀賂之。每省至二萬餘兩。往往貸於京師富豪、復任之日、取官庫所貯、倍償之。其名爲京債。上下交征、恬不爲異。瑾聞之、心不自安。(中略)差官查盤、以欲掩其迹也。於是、各有司、又斂銀陪庫、天下騷然。

(34) 明實錄正德元年二月乙卯に

巡撫眞定都御史王璟、請革皇莊。(中略)時大學士劉健等亦言。(中略)管莊內官、假托威勢、逼勒小民、其所科索、必踰常額。況所領官校、如餓豺狼、甚爲民害、以致蕩家產、鬻兒女、怨聲動地、逃移滿路。京畿內外、盜賊縱橫、亦由於此。

(35) 明實錄正德六年三月乙亥に

巡撫河南都御史鄧庠奏。河南盜起、民窮財盡、皆由先鎮守太監廖鐙、與其弟指揮使鵬、括利害人、擅作威福、糾用群小。

(36) 明實錄正德六年三月癸亥に

巡按直隸監察御史李嵩奏。南宮・寧晉・新河・隆平四縣、管皇莊太監劉祥・金鳳等、先後十數人、專肆剋剝、民甚苦之。恐相率爲盜。

(37) 明實錄正德六年三月丙子に

太監張永傳旨。近來各處盜賊縱橫、多因水旱、衣食艱窘、各有司不能賑恤。茲又稱科斂、而侵剋之。及朝廷下詔蠲免錢糧、乃將虛文起解之數、捏作已征。或將已征、捏作未征、重復征解、以致小民冤苦無伸、流離失業、相誘爲非。李光壁氏や趙儼生氏の論文(前注(1)(2))は、起義の發展段

階、殊に綱領に即して書かれていないため、時期区分は必ずしも正確でない。

(39) 明實錄正德四年九月丙午。

(40) 明實錄正德四年二月甲戌。

(41) 明實錄正德四年秋七月壬寅。尙明史紀事本末では天津駐在者を段毅としているが、柳尙義の誤まりである。

(42) 明實錄正德五年二月辛丑。

(43) 明實錄正德五年三月戊辰。同書五年六月甲戌。

(44) 明實錄正德七年八月庚午に

初交河縣人楊虎・劉儒、滄州人馬文衡・許浦、俱都御史寧果麾下健兒、弓馬殊絕。久之、與滄州仲善良、聚衆數百人、入滄州劫掠。

(45) 明實錄正德五年冬十月乙巳に

蕡霸州強賊劉七等三十四人罪。劉七本名晨、與其黨皆霸州・永清・固安等縣農家。州以盜多不能制。聞晨及其兄劉六善騎射、召令與其黨齊彥名等、協捕有功。後凡遇警、皆令晨等隨捕以爲常。逆瑾家人梁洪索貨於晨等、不得。遂誣爲賊。奏遣御史寧果・柳尙義、調兵圍形捕之。連繫妻孥、盡破其家。晨等窮蹙憤恚、乃相聚劫略。至是、以詔旨、許自首免罪。詣州自首、知州郭坤以聞。下兵部議覆。遂貰之。仍令協捕他盜、自效。未幾、晨等復叛。

(46) 明實錄正德七年八月癸亥。

(47) 明實錄正德五年秋七月丁巳。

(48) 明實錄正德七年八月癸亥（前注(46)の後文）に
庚午春夏間、河間參將袁彪、數敗茂及諸賊。茂窘、乃求救

於忠。忠置酒私第、招彪與茂、東西坐。舉酒屬彪、視茂曰。此彥實吾弟也。爾今後好相看、無相扼也。又舉酒屬茂曰。袁參將、今日與爾有一面之好。爾今後無寇河間。彪畏忠、不敢誰何。

(49) 明實錄正德五年三月乙酉。同五年四月乙未。同五年七月丁巳。

(50) 明實錄正德七年八月癸亥（前注(48)）の續文。

(51) 前注(49)參照。

(52) 明實錄正德七年八月癸亥（前注(48)(49)(50)）の續文。

(53) 明實錄正德六年春正月辛巳。

(54) 明實錄正德六年三月丁巳。

(55) 西園聞見錄卷八十、「胡公世寧復內閣靳宗伯書」に

楊虎・李龍（隆？）一起、初起山東、多攜婦女、多兼蠶弱、略無精銳。而惟隨處殺人、以張其威、分投放火、以示其衆。若劉六・劉七一起、另起河北、不挈婦女、不兼蠶弱。初然、止有八十餘騎、領爲輕銳。旣而與楊虎等、合爲一夥。部下貪財・好色・自縱之心、皆效楊虎等所爲。各挈婦女、各兼蠶弱。是以其勢漸衰。通料其人、不滿二千。而能戰有器械者、不過三四百耳。

(56) 明實錄正德六年四月辛丑に

巡按山東御史陸藝奏。博興・滕（中略・十七）州縣、鎮・集・驛遞二十餘處、自正月以來、爲賊所破。焚劫官廨、居民死者、常數百人。官軍望風先遁、賊勢縱橫、如入無人之境。而脅從投入者日衆、生靈之慘、大可寒心。

(57) 明實錄正德六年四月壬寅。

- 63 明實錄正德六年四月癸卯。
69 明實錄正德六年五月己未。
60 前注63參照。
61 七修類稿卷十三、國事類「霸州賊」。
62 罪惟錄傳卷三十一「劉寵劉晨楊虎劉惠」(以下「罪惟錄」と略記す)。明史紀事本末卷四十五。明實錄正德七年九月庚子。
63 明實錄正德六年五月壬戌に
礫賊首官大保于市。大保永清縣吏、縱酒賭博。遂曠役糾集無賴、與賊劉七合。景・虹・靈壁・沂水・濰・樂安・泰安・陽信各州縣、及呂梁・洪官署、皆爲攻破。僭號大王、所王屠戮。
64 明實錄正德六年六月丁亥。
65 明實錄正德六年六月甲午。
66 劉六らが湖廣から江西まで行ったというが、實態は殆んど握めない。しかし約一年前に安陸府沔陽等の所で、楊清、丘仁らが天王將軍を號し、洞庭湖を往來したというから(明實錄正德五年七月壬申)、恐らくこの殘黨を糾合するのが目的だったと考えられる。事實この後、起義軍が揚子江に近づく時、いつもこれらの地を経由していることから傍證されよう。
67 明實錄正德六年七月甲子に
兵部奏。近聞、強賊劉六等、由湖廣・江西、自南而北、踰山東長清・齊河等縣、直抵霸州。復往山東而南。強賊楊虎等、由河南・山西、自西而東、踰曲周・威縣、直抵文安。(中略)往復縱橫、如蹈無人之境。
68 明實錄正德六年六月癸未に
山西盜李華等起。逆瑾黨亡命者、多從之。衆至千人。衣幟皆赤、與劉六等合、掠壺關縣之趙村、大肆焚戮。藩王乞師討之。
69 明實錄正德六年六月丁亥に
先是、河南按察使彭澤言。(中略)臣意、賊計有三。(中略)憑山谿之險、糾合土賊、招聚亡命、迫脅善良、則環百數十里之境、民畜錢穀、皆爲所有。
70 この後の起義軍の行程、殊に劉六ら河北軍の行軍は、祝允明の「江海殲渠記」(今獻堂言所收)に最も詳しく記されている。本書を最初に紹介されたのは李光壁氏の修正稿に於いてであった(前注(1)參照)。
71 江海殲渠記。明實錄正德六年七月癸酉。
72 前注69參照。
73 江海殲渠記。明實錄正德六年七月丁巳。
74 明實錄正德六年七月壬申。
75 明實錄正德六年八月戊寅朔に
提督軍務總兵等官都御史馬中錫・張偉等奏。流賊劉寵・劉晨・楊虎・李隆等四十三人、悔過自首。且言、寵等先以犯罪、迫饑寒爲盜。罪惡雖不可原、然其初心不過避死。今既畏法悔罪。乞下廷臣議處。
76 明實錄正德六年三月庚午。
77 漢書卷八十九「龔遂傳」。
78 明實錄正德七年八月癸亥に
都御史馬中錫奉命討之。中錫家在故城、懼賊殘其墳墓、乃爲招撫之計。嘗與賊會飲于桑園。時已有詔旨、劉六等不

赦。又懸賞、格募能斬之者。中錫酒中云云。晨曰無多言。吾已知朝廷不赦我輩矣。中錫曰無之。晨乃出詔旨於袖中、拂衣挺刃而去。凡京師動靜、悉先知之、以貂蟬爲之奧主也。自是數盜者、橫行中原、殺人滿野。村市爲墟、喪亂之慘、乃百十年來、所未有者。

79 西園聞見錄卷八十往行「趙鏐」。この記事は楊虎・劉三・趙風子等の河南軍系の動きを伝える最も基礎的史料の一つである（以下「西園記」と略す）。

80 後注①参照。

81 明書卷一百六十二に

賊已聚至萬數人。因相約曰。且勿薄京師。須先得河北・河南、直抵金陵。可就彼封侯拜將。於是分其黨爲二。劉六・劉七・齊彥名等爲一黨、推劉六爲主。楊虎・劉惠・趙鏐等爲一黨、推楊虎爲主、各行劫。

82 罪惟錄傳卷三十一に

賊已數萬。久分爲二。劉部其弟農・齊彥名等、寇山東、楊虎部劉惠・趙鏐等、掠河南。約共有南都議封拜。

83 李光壁「明中期劉六・劉七の農民大起義」（『中國農民起義論集』三聯書店 一九五八）二八四頁。なお趙鏐生氏は綱領には全く言及していない。

84 前注81②参照。

85 西園聞見錄卷八十往行「趙鏐」で、楊虎を大王に互選したという「劉三・趙風子、刑老虎、董仲義」らは、いずれも楊虎・劉三系の人脈の人達ばかりで劉六系の人間が入っていない。またたとえ楊虎一人が首領に推されたとしても劉六らは別行動を

採ったであらうし、逆にこの時点では、たとえ首領が二人いたとしても、今までの提携關係からいえば戰鬥力に變化は來たさなかったであらう。

86 何鑑は北邊が平靜だといっているが、少くとも明實錄によれば弘治期から小王子が絶えず北邊を脅している。

87 明實錄正德六年七月癸酉に

兵部尙書何鑑言。直隸・河南・山東、盜賊縱橫、非京營軍所能制。宜府・延綏二鎮、遊奇兵數多。且邇來邊警稍緩。請調副總兵許泰・馮祺、遊擊將軍鄧永、各領所部。（中略）所過有司、給芻糧。（中略）從之。調邊兵、自此始。

88 明實錄正德六年八月己卯。

89 馬中錫は正德六年八月乙巳に捕えられ、この後、賊が故城縣を攻めた時、彼の家を焼かなかつたとの理由で（紀事本末）、七年五月辛酉に錫衣衛の獄に下され殺された。

90 明實錄正德六年九月戊申。

91 民壯については、佐伯富「明清時代の民壯について」（『東洋史研究第十五卷第四號 一九五七、のち『中國史研究 第一』京都 東洋史研究會 一九六二に復載）や、岩見宏「明代の民壯と北邊防衛」（『東洋史研究第十九卷第二號 一九六〇』、山根幸夫「明代徭役制度の展開」（『東京女子大學學會 一九六六』第二章第三節などに詳しい。

92 明實錄正德六年七月甲子。

93 明實錄正德六年七月癸酉に

各處軍民子弟、有諳武藝者、宜令提督巡捕官招募、令其立功、一體陞賞、毋爲賊用。從之。

04 明實錄正德六年八月戊寅朔に

兵部覆。(中略)一、三衛軍少。欲募民間子弟、開習弓馬者、殺賊。照例陞賞。(中略)一、天津濱海富強之家、內多勇悍。乞編爲排甲、聽自備器械、以俟調遣。(中略)從之。

05 明實錄正德六年九月己酉。

06 明實錄正德六年九月庚戌。

07 明實錄正德六年九月戊申。

08 明實錄正德六年九月癸亥。

09 江海殲渠記。明實錄正德六年九月辛酉。尙、この戰鬪で、劉

七の弟劉四や、齊彥名の弟齊仲德らが殺されているから、滄州綱領採擇後、少なくともこの頃までは楊虎軍に劉六軍系列の人間を加えていたことが判る。

000 楊虎の死んだ時を十月二十四日としたのは、江海殲渠記に據つたためである。實錄系の史料は以聞され裁決が下されてから記載されることが多いから、約二十日間程遅れていることが多い。明史紀事本末、國朝典彙、明書などは十一月説を採り、國権は十二月二十三日の項に載せている。このように諸説が生じたのは、實際に楊虎を殺したのが武平衛百戸の夏時であったにも拘らず、その上官である指揮使石堅がその功績を横取りしようとして夏時を脅迫し口封じをしていたため、官側に知れるのが遅れたためである(明實錄正德八年三月丙戌)。

000 楊虎の没地を義門鎮としたのは明實錄に據る。明史紀事本末は白龍王廟とし、江海殲渠記や罪惟錄、國朝典彙、明書などは確かな地名を擧げていない。尙、西園聞見錄卷八十往行「趙

鏐」は楊虎系の行軍に詳しいが、どういうわけか、楊虎の死については全くふれていない。

001 明實錄正德六年九月癸亥。

002 明實錄正德六年九月丙寅に

提督軍務侍郎陸完奏。賊劉六等、攻青・沂・沭。皆親王封國。恐賊計窮、挾宗室爲蔽。涇王祐楨亦奏、乞發兵救護。

(中略)許之。

003 前注002參照。

004 明實錄正德六年冬十月庚辰。

005 明實錄正德六年六月丁亥。

006 明實錄正德六年六月癸未。

007 明實錄正德六年七月辛未。

008 布目潮風氏によれば、明初諸王就藩の理由の一つに、「國防の擔當」ということがあったが、その後消滅したという(「明朝の諸王政策とその影響(上)」史學雜誌第五十五編第三號一九四四)。

009 武宗皇帝のあまりの御亂行に對し、當時皇親王達の中には帝位篡奪を狙う皇親王がいた。安化王朱寘鐸の叛亂は本稿第一節で言及したが(前注04參照)、その他、例えば後に叛亂を起す寧化王朱宸濠なども早くから帝位を覬い、こともあろうに武宗がもつとも信頼していた宦官劉瑾と密通していた(明實錄正德二年五月己巳)。

010 明實錄正德六年十月甲申に

賊劉六等攻濟寧州、不克。焚糧運船千二百一十八艘。遂焚都水分司、執主事王寵、尋釋之。

尙、江海蟻渠記では濟寧戰を十月二十八日のこととしているが、いま實錄に従う。

0112 明實錄正德六年十一月丙辰。

0113 罪惟錄傳三十一、明史紀事本末卷四十五、明實錄正德七年九月庚子。

0114 罪惟錄の著者查繼佐は、この金旗が趙鏐（趙風子）自身の筆で書かれたといっている。

0115 通典卷二十九、職官十一、武官下、「虎賁中郎將」によれば、虎賁とは近衛兵のようなものであったことがわかる。

0116 易經、乾に「九五、飛龍在天、見利大人」とあり、その疏には「若聖人有龍德、飛騰而居天位」という。また書言故事の「人君類」や、故事成語考の「朝廷」の項の説明では、皇帝の即位することを「龍飛」という。

0117 輟耕錄卷二十七に

中原紅軍、初起時、旗上一聯云。虎賁三千、直抵幽燕之地。龍飛九五、重開大宋之天。

0118 西園聞見錄卷八十往行「趙鏐」に

〔正德七年正月〕本月十三日、（中略）鏐等查得、二十八營人馬、共有一十三萬五千餘騎、造有各賊花名文冊六本、分各收拿點聞。

0119 明實錄正德六年十二月壬辰。

0120 明實錄正德七年九月庚子に

磔反賊趙鏐等於市。鏐卽趙風子。少爲文安諸生、每大言自負。（中略）分爲二十八營、統衆至十三萬。分掠州縣。鏐說惠、盡返虎所爲、禁焚掠屠戮。

0121 明實錄正德七年春正月甲寅。

0122 明實錄正德七年春正月己未。

0123 李隆は群盜期から有名な盜賊だったが、後楊虎と行動を共にしていた。しかし新蔡で再編成された河南軍の主要メンバーには入っていない。河南軍から輕視されて河北軍についたのか、それとも河南軍の派遣した京師討伐軍であったのだろうか。いずれにせよ、起義軍の内部には抗争があったことが判る。

0124 當時南陽府唐縣で長期滞在中の河南軍本隊と連絡をとったかどうか不明。

0125 明實錄正德七年春正月丁巳。

0126 近年京師や各邊の官軍二十萬人・馬三十萬頭を使い、兵餉や馬草等の軍費が正德六年一年間だけでも太倉銀九十餘萬兩を超過して、今後の軍費の出所がなかった（明實錄正德七年正月癸酉）し、更に糧運船が狙い打ちされて國家財政が極端に窮乏していた（明實錄正德六年十一月丙辰）。

0127 新蔡附近で政權篡奪宣言が行われた正確な日時は判明しないが、前後關係から推して正德六年十一月下旬のことと考えられるから、わづか四十日間程を経ただけのことである。

0128 李光壁氏の修訂論文二八四頁、趙儒生氏の復載論文一三八頁。（それぞれ前注(1)(2)を参照されたい。）

0129 明史卷一百八十八「蔣欽」傳に

一賊弄權、萬民失望、愁歎之聲、動徹天地。（中略）陛下尙何以自立乎。幸聽臣言、急誅瑾以謝天下。然後殺臣以謝瑾。使朝廷一正、萬邪不能入。君心一正、萬欲不能侵。臣之願也。

030 道光汝州全志卷五兵防、「附明季兵禍」に

薊賊劉六劉七（中略）攻寶豐破之、知縣徐端遁去。（割注）。
寶豐土城不能御、遂入搶掠。賊首領趙風子鏐、係文安秀才、
注念斯文。凡士大夫家、授令箭一枝、掛藍衫於門前、部卒
俱不敢入、百姓殺戮亦少。

欄衫は藍色で縁取られていたため藍衫ともいわれた（正字通）。
三才圖繪衣服卷三に繪が載っている。

031 明實錄正德七年二月丁丑。

032 明實錄正德七年三月丙午。

033 明實錄正德七年三月丁未。

034 明實錄正德七年九月庚子に

屢攻南陽不克。獲舞陽僧德靜者、詐指爲唐王宮人所生、常
置諸營中、欲資以爲名號。

035 西園聞見錄卷八十往行「趙鏐」、明實錄正德七年九月庚子、

罪惟錄傳三十一、明史紀事本末卷四十五。

036 罪惟錄傳三十一「劉龍劉晨楊虎劉惠」に

論曰。觀二劉之樹研焦芳、不屠均州。其所持、足以警衆。
（中略）或曰。如二寇、行小仁義。

037 明實錄正德七年閏五月壬辰。

038 增廣智囊補卷二十四、兵智部、武案、「火老鴉」の項。

039 明實錄正德七年八月癸亥。尙、數年後、劉七を西山塞下に見
た者があり、狼山では死ななかつたとの説もある（罪惟錄傳卷
三十一）。また正德八年三月には、通州狼山に江海神廟を立て
たという（明實錄正德八年三月癸未）。

040 明實錄正德七年九月癸酉。

041 明實錄正德七年九月庚子。

042 明實錄正德七年十月己巳。

043 明實錄正德七年十月丁卯。同七年十二月庚戌。同八年正月戊
子。同八年正月乙未。同十二年二月壬戌。同十二年四月癸丑。

044 明實錄永樂十一年二月癸亥。

045 谷光隆著『明代馬政の研究』（京都 東洋史研究會 一九七
二）第四章「北直隸の孳牧體制」に詳しい。

046 明實錄正德七年三月庚戌に

山東布政使姜洪乞休致、因陳除寇安民事宜。（中略）每戰、
則置脅虜於前行、小卹、則率親黨而先遁、所以我軍屢勝、
而渠魁終不可得也。今賊一人、常兼兩馬、一日夜馳二三百
里。椎牛倒廩、資食於民。官軍一道而行、既不設奇分兵
合勦、又不據險設伏邀擊。及至近賊、賊又乘間去矣。

047 西園聞見錄卷八十「胡世寧復內閣靳宗伯書」に

至于楊虎等之攻涪州、挫銳堅城之下、久持不去。每日賊徒
四散遠掠。賊首數人、各住關廂、居民之家、晝夜荒于酒
色、左右前後、各不相顧。使城有主者、募販鹽之徒、以爲
外應。招被擄之民、以爲內間。

048 明實錄正德六年六月丁亥。

049 前注048参照。

050 前注049参照。

051 明實錄正德七年七月戊戌。

052 明實錄正德七年三月丙午。

053 張獻忠起義については李文治『晚明民變』（中華書局、一九
四八）や、谷口規矩雄『明代の農民叛亂』（岩波講座世界歴史

第十二冊、一九七二)に詳しく、捻軍については、小野信爾「捻子と捻軍」(東洋史研究第二十卷第一號 一九六二)に詳しい。

054 趙繼生氏の再録論文(前注②参照) 一三五—一三六頁、一四五頁以下。

055 西園聞見録卷八十「胡世寧復内閣斬宗伯書」に

賊之初起、本不多人、而惟係虜各處壯丁、脅以兵刀、付以鞍馬、使之從己。初則殘其髮膚、使有記認、難于脫逃。後惟逼以放火・攻城、分以財物。使有罪累、自不敢逃。凡遇官軍誅討、則必當前、而各賊立馬、監束其後。勝則賈勇直前、敗則後在逃去。而惟此輩受擒被戮。朝廷如此、非其本心。是以累降詔旨、赦其脅從。(中略)奈何將官有司、俱不遵守、臨陣所殺、既惟此脅從之人、而其背賊逃回者、又不審來歷、而一概擒之。此所以絕其求生之路、而堅其從賊之心。

056 李自成的亂では「均田」が唱えられた。李文治「晚明民變」(中華書局、一九四八)、傅玉璋「談論李自成的均田」(歷史教學一九五七年一期)、史紹賓編『中國封建社會農民戰爭問題討論集』(三聯書店 一九六二)、王守義「明末均田口號質疑」(歷史研究一九六二年二期)、劉重日「明末均田口號質疑的質疑」(歷史研究 一九六二年五期)、孫祚民「試論李自成大順政權的性質」(新建設、一九六二年三期)、曹貴林「李巖述論、歷史研究 一九六四年四期)、同「論大順政權的性質」(歷史研究 一九六五年一期)、谷口規矩雄「明代の農民叛亂」(岩波講座世界歷史第十二冊、一九七二)等々がある。

057 小山正明「明末清初の大土地所有」(史學雜誌第六十七編第一號 一九五七)、田中正俊「民變・抗租・奴變」(『世界の歴史』十一 筑摩書房 一九六二)、森正夫「十七世紀の福建寧化縣における黃通の抗租反亂」(名古屋大學文學部論集、史學二〇、一九七三)。

058 前注057参照。

059 明實錄正德七年三月癸酉。

060 國權卷四十八、正德六年八月乙巳の條に引用された「彰德府志」による。

061 前注059参照。

062 明史紀事本末卷四十五に

時、劉六・劉七・齊彥名、雖擁衆數萬、然多劫掠脅從之徒。其親信驍勇、善騎射者、不及千人。

063 趙風子が十三萬と號するのに對し、官側の發表では(明實錄正德七年二月甲午。同書七年三月己巳)三萬餘騎というから。

064 均州を攻圍して五日間、寶豐縣で三日間駐屯している(西園錄卷八十往行「趙錢」)。

065 前注040参照。

066 明實錄正德七年冬十月壬戌。

067 前注040参照。

068 前注039参照。

069 前注040参照。

070 明實錄正德六年六月乙巳に

御史王相奏。(中略)今盜賊所過鄉落、莫不椎牛供具。甚至、爲之持門扉、以遮矢石、爲鄉導以攻州縣。民心豈願爲

哉。爲從之則生、不從則死也。盜有生殺之權、人不敢違命。

072 明實錄正德十年四月壬子。

073 明實錄正德六年夏四年壬寅に

十三道御史賀銳等、亦以爲言、且謂。山東居民、凡賊過之處、則樂於供給、糧卓・器仗、皆因於民。棄家從亂者、比比而是。官軍所過之地、卽閉門逃遁。箠楚驅逼、猶不肯前。懸賞召募、亦鮮赴者。蓋以供億之煩、搜索之苦、或掩殺報功、尤甚於賊。

074 明實錄正德六年八月癸巳に

天津兵備少卿陳天祥奏。(中略)賊所過姦民、多助賊荼毒者、宜禁約。

075 宦官勢力の擡頭と裏腹に「文臣の禍」があったから、宦官の

所爲(皇害)を影で嘲笑する者達は多くいた(前注08參照)。

また寧采ら捕盜御史の設置にも批判が多かった(前注04參照)。

076 前注03參照。

077 張萱の「西園聞見錄」や谷應泰の「明史紀事本末」も第一級の

詳しい史料を提供しているが、これらは體系的編纂書でもある點で、祝允明の場合とは異なる。

078 宮崎市定「明代蘇松地方の士大夫と民衆」(史林第三十七卷

第三號 一九五四、『アジア史研究第四』に復載)。

079 前注04參照。

080 前注05參照。

081 亡命には、單に流民の意味で使われる場合と、無賴の意味で使われる場合と二通りあったようである。

082 楊虎や劉六らも一種の私兵であったが、副總兵劉暉ですら家兵を率いていた(明實錄正德七年三月己巳)。

083 前注04參照。

084 前注0204等參照。尙、宦官の家人や鹽徒等はいつの時代にも

ある超歴史的存在とも一應考えられはする。宦官については清水泰次氏(「自宮宦官の研究」史學雜誌第四十三編第一號一九三二)、「私白に就いて」歴史と地理第三十卷第一號一九三二と、曾我部靜雄氏(「私白宦官の意義」歴史と地理第二十九卷第五號一九三二)、「私白宦官の意義に關する補足」歴史と地理第三十卷第一號一九三二との間で、嘗て自宮宦官の起源をめぐって論争が行われたが、しかし、明代中期、殊に正德期に宦官の絶對數が壓倒的に増え、從つて宦官の家人數も増えたことは誤りない事實であらう。また鹽徒についても、宦官が私鹽の販運に乗り出す(皇鹽)というような時代だったから、鹽徒の總數は著しく増加したと考えられる。

085 これらに就いては機會があれば、別に論じて行き度い。

086 皇明經世文編卷二百二、夏文愷公文集「勘報皇莊疏」に

權勢橫行、何所控訴。產業既失、糧稅猶存。徭役苦於併充、糧草困于重出。飢寒愁苦、日益無聊。展轉流亡、靡所底止。以致強梁者、起而爲盜賊、柔善者、轉死於溝壑。其巧黠者、則或投充勢家莊頭・家人名目、資其勢以轉爲良善之害。

087 これらの中から棍徒になったり、また紀綱の僕(佐伯有一「明末の董氏の變」東洋史研究第十六卷第一號 一九五七)に

(188) 明實錄正德七年七月戊戌。明史紀事本末卷四十五の卷末。

(189) 趙風子は破れてから江西の賊をバックに再擧を狙っていたし、また劉六劉七らも、塞外や海に出て再擧を圖ろうとしたことはあるが、これらは破れたからであつて連帶とはいえない。

(190) 流民については、清水泰次「明代の流民」(東亞經濟研究第五卷第一號 一九二一)、同「明代の流民と流賊」(二)(史學雜誌第四十六編第二號第三號 一九三五)、横田整三「明代における戸口の移動現象について(上)(下)」(東洋學報第二十六卷第一、二號、一九三八)、谷口規矩雄「明代中期荆襄地帶農民叛亂の一面」(研究第三十五號、一九六五)等に詳しい。

(191) 嘉靖隆慶期の丈量で、佃戸が丈量冊に登録されることの意義の一つに、直接生産者を生産の場に繋ぎ止める狙いがあり(拙稿「明後期の丈量について」史林第五十四卷第五號一九七一、

四四〇四五頁)、また萬曆期の荒地や屯田に對する丈量では、流民を招撫するという前提がついていて、勸農治安對策を兼ねており、萬曆九年の張居正による全國土地丈量でも勸農治安對策的效果がやはりもり込まれていた(拙稿「張居正の土地丈量(上)」東洋史研究第三十一卷第一號、一九七一、四〇〇四一頁、五〇頁)。

略記 一 覽

「紀事本末」|| 明史紀事本末卷四十五、「平河北盜」。

「江海記」|| 江海殲渠記。

「西園錄」|| 西園聞見錄卷八十往行、「趙鏐」の條。

「罪惟錄」|| 罪惟錄傳卷三十一、「劉寵劉晨楊虎劉惠」。

Karma”) It is said that Manicheism was introduced into Fu-jian 福建 and Liang-zhe 兩浙 during the Song period. It was, no doubt, being taught in Wen Zhou 溫州 and Tai Zhou 臺州 around the time of the revolt. It is therefore possible that people such as Lü Shi-nang 呂師囊 who rose in revolt in Tai Zhou in response to Fang La, were Manicheans. But there is no evidence that the religion had been introduced by this time into Mu Zhou 睦州, the center of the revolt. Moreover, it was only after the capture of Fang La and the destruction of the main force of the revolt that a ban was imposed on the practice of *Chi-cai-shi-mo*. The ban was, in fact, imposed as one of the means for suppressing the remnants of the revolt in the Tai Zhou region. Thus, Fang La himself and the main force of the revolt lead by him were not Manicheans, though Manicheans seemed to have joined this revolt in Wen Zhou and Tai Zhou.

The Revolt of Liu Liu 劉六 and Liu Qi 劉七

Genshō Nishimura

There were peasant rebellions all over China in the early sixteenth century. The rebellion of Liu Liu and Liu Qi was one of the greatest ones. Because of so-called “Huang hai” 皇害 (imperial incompetence) and the arbitrary behavior of local officials which was linked with it, the whole country fell into a panic, and at last there occurred a large scale peasant rebellion around the capital where the exploitation was the severest.

At first, in the 4th year of Zheng De 正德 (1509), the rebellion took the form of banditry, but, in the 6th year (1511), the rising spread to He-bei 河北, Shan-dong 山東, He-nan 河南, Shan-xi 山西, Jiang-su 江蘇, An-hui 安徽, and Hu-bei 湖北 provinces, then at last it was defeated in late July of 1512.

In July of 1511, at Cang-zhou 滄州, a program was adopted, which systematized tactics which had succeeded since the uprising began, and em-

bodied the slogan "Jian guo fu xian" 建國扶賢, and projected an assault upon Nanking 南京 and reliance upon Princes 皇親王 of the Ming imperial house. After Yang Hu 楊虎 died at the end of November, the rebel army divided into a He-bei band commanded by Liu Liu and a He-nan band under Liu San 劉三 and Zhao Fengzi 趙風子. In the vicinity of Xin-cai 新蔡 county the He-nan force was reorganized with the introduction of order and discipline, pledging to overthrow the Ming and establish a rebel government. But within a few-months, the He-nan force was defeated, and next the He-bei band was destroyed.

The most conspicuous characteristic of this revolt was its guerrilla tactics, but it was only possible because of massive support by the peasantry. Through the analysis of the leaders, we can find two more special features of this revolt; one is that it has the aspect of a riot by the peasants on account of starvation, yet another point is that it was a rebellion conducted under the auspices of the privileged classes. These characteristics were reflected in the Cang-zhou program and kept it from being complete. It was because such intellectuals as Zhao Fengzi joined in it that it escaped from this incompleteness. But the intellectuals had their own limitations.

Rural Society in Jiang-nan 江南 District in 1910's

Yoshio Kojima

Since the end of the 19th century, the rural economy of Jiang-nan 江南 was closely connected with the international market by the economic encroachment of the western powers, and the reproduction activities of the peasantry were subjugated to modern capital by the medium of comprador capital and the pre-modern merchants. This tendency can be seen not only in the silk and cotton textile industries but also in grain production.

Through exploitation by modern capital and pre-modern commerce, the downfall and dissolution of the peasantry was accelerated,